なか〳〵やうかはる有様を、あはれと叡慮にかけまくも、忝しやこの御幸、柴の摳の暫しがほども、あるべき住居なるべし。

シテ謠「思はずも深山の奥の住居して、雲ゐの月をよそに見んとは。かやうに思ひ出でしに、この山里までの御幸、かへすゞ〳〵も有難うこそ候へ。法皇詞「さいつ頃或人の申せしは、女院は六道の有様まさに御覧じけるとかや。佛菩薩の位ならでは見給ふことなきに不審にこそ候へ。シテ詞「勅諚はさる御事なれども、つら〳〵我が身を案じ見るに、クリ謠「それ身を觀ずれば、岸の額に根を離れたる草、地謠「命を論ずれば、江の邊に繋がざる舟。シテサシ謠「されば天上の樂も、身に白露の玉葛、地謠「長らへ果てぬ年月も、終に五衰の衰への、シテ謠「消えもやられぬ命の中に、地謠「六道の巷に迷ひしなり。

クセ地謠「まづ一門、西海の波に浮き沈み、よるべも知らぬ船の内、海に

○思はずも深山の奥の住居して―「思ひきや山の奥に住居して、雲居の月をよそに見むとは。」（平家物語灌頂巻、建禮門院）
○六道―善悪の業因によりて、行くべき六種の世界、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上をいふ。
○身を觀ずれば―「觀レ身皐額離レ根草、論レ命江頭不レ繫舟。」（和漢朗詠集、雜、羅緯）
○天上―天上界。天人の住む世界にしてその身清淨にして塵垢を受けず、大光明を有して、心中に常に歡樂を生じ、諸事意に適ふといふ。

臨めども、潮なれば飲水せず、餓鬼道の如くなり。また或時は汀の波の荒磯に、打返すかの心地して、船擧りつゝ泣叫ぶ聲は叫喚の、罪人もかくやあさましや。シテ謠「陸の爭ひある時は、地謠「これぞ眞に目の前の、修羅道の戰あら恐ろしや數々の、駒の蹄の音聞けば、畜生道の有様を、見聞くも同じ人道の苦しみとなり果つる、憂き身の果ぞ悲しき。

法皇詞「眞に有難き事どもかな。先帝の御最期の有様、何とか渡り候ひつる、御物語り候へ。シテ詞「恥かしながら語つて聞かせ申し候べし。

語「その時の有様申すにつけて恨めしや。長門の國早鞆とやらんにて、筑紫へ一先落ち行くべきと一門申合ひしに、緒方の三郎が心變せしほどに、薩摩潟へや落さんと申しゝ折節、上り汐に支へられ今はかうよと見えしに、能登の守教經は、安藝の太郎兄弟を左右の脇に挾み、最期の供せよとて海中に飛んで入る。語「新中納言知盛は、詞「沖なる船の碇を引揚げ、兜とやらんに戴き、乳母子の家長が弓と弓とを取交

○五衰―天人の果報の盡くる時に現はるといふ、五つの衰相。顧盡之時、五衰相現。一者頭上華萎、二者眼瞬、三者身上光滅、四者腋下汗出、五者自然離二於本座一。（因果經）
○叫喚―地獄道の一。叫喚地獄。
○緒方三郎―維義といふ、豐後の豪族。

し、そのまゝ海に入りにけり。謡「その時二位殿純色の二つ衣に、練袴のそば高く挟んで、我が身は女人なりとても、敵の手には渡るまじ、主上の御供申さんと、安徳天皇の御手を取り、船端に臨む。いづくへ行くぞと勅諚ありしに、この國と申すに逆臣多く、かくあさましき所なり。極楽世界と申して、めでたき所のこの波の下に候なれば、御幸なし奉らんと、泣く泣く奏し給へば、さては心得たりとて、東に向はせ給ひて、天照大神に御暇申させ給ひて、地謡「また十念の御爲に、西に向はせおはしまし、シテ謡「今ぞ知る、地謡「御裳濯川の流には、波の底にも都ありとはと、これを最期の御製にて、千尋の底に入り給ふ。自らも續いて沈みしを、源氏の武士取上げて、かひなき命長らへ、二度龍顔に逢ひ奉り、不覺の涙に袖をしぼるぞ恥かしき。

地謡「いつまでも、御名殘はいかで盡きぬべき、はや還幸と勸むれば、はや還幸と勸むれば、御輿を早め遙々と、寂光院を出で給へば、シテ謡

○その時二位殿―平家物語卷十一先帝御入水の事による。

○今ぞ知る―此の歌源平盛衰記に二位尼の作として出づ。平家物語になし。

女院は柴の戸に、地謡「暫しがほどは見送らせ給ひて、御庵室に入り給ふ、御庵室に入り給ふ。

○元雅―結崎元雅、世阿彌の子。

（七）隅田川

世阿彌作
一說元雅作

シテ　梅若丸母
子方　梅若丸幽靈
ワキ　渡守
ツレ　（男）旅人
場所　武藏國隅田川
季節　三月

ワキ詞「是は武藏の國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ、人々を渡さばやと存じ候。又此の在所にさる仔細有つて、大念佛を申す事の候間、僧俗を嫌はず人數を集め候。其の由皆々心得候へ。

○隅田川―近き世の傳說を素材としたるものにて伊勢物語の記事を取合せたり。○此の在所―今の向島木母寺をその遺跡と傳ふ。

ワキツレ次第謡「末も東の旅衣、末も東の旅衣、日も遙々の心かな。詞「かやうに候者は、都の者にて候。我東に知る人の候程に、彼の者を尋ねて唯今罷り下り候。道行謡「雲霞、あと遠山に一「山遠雲埋行客跡、松寒風破旅人夢」（和漢朗詠集下雲、紀斉名）

○雲霞あと遠山に越えなして、いく關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、こゝぞ名におふ隅田川、渡りに早く着きにけり、渡りに早く着きにけり。

ワキツレ詞「急ぎ候程に、是は早隅田川の渡りにて候。又あれを見れば舟が出で候。急ぎ乗らばやと存じ候。如何に船頭殿舟に乗らうずるにて候。ワキ詞「中々の事、めされ候へ。先々御出で候跡の、けしからず物騒に候は何事にて候ぞ。ワキツレ詞「さん候都より女物狂の下りにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（後撰、雑、藤原衆幹）

○「人の親の心は闇

舟をとゞめて、彼の物狂を待たうずるにて候。

シテ謡「實にや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひしら雪の、道行人に言づてて、行方を何と尋ぬらん。上歌謡「聞くや如何に、上の空なる風だにも、地謡「松に音する習あり。シテ謡「眞葛が原の露の世に、地謡「身を恨みてや明け暮れん。シテ謡「是は都北白河に、年經て住める女なるが、思はざる外に獨子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば、逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の、跡を尋ねて迷ふなり。下歌地「千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、上歌地「もとよりも、契假なる一つ世の、契假なる一つ世の、其の内をだに添ひもせで、こゝやかしこに親と子の、四鳥の別れ是なれや、尋ぬる心の果ならん、武藏の國と、下總の中にある、隅田川にも着きにけり、隅田川にも着きにけり。

シテ詞「なう〳〵我をも舟に乗せて賜はり候へ。ワキ詞「お事は何くより何方へ下る人ぞ。シテ詞「是は都より人を尋ねて下る者にて候。ワキ詞「都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずば此の舟には乗せまじいぞとよ。シテ詞「うたてやな隅田川の渡守ならば、日

○雲霞あと遠山に一「山遠雲埋行客跡、松寒風破旅人夢」（和漢朗詠集下雲、紀斉名）

○「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（後撰、雑、藤原衆幹）

○「聞くや如何に上の空なる風だにも、松に音する習ありとは」（新古今、戀、宮内卿）

○「わが戀は松にしぐれの染めかねて眞葛が原に風騒ぐなり」（新古今、戀、慈圓）

○千里を行くも一「親千里行不忘子」（白氏文集）

○契假なる一つ世一「親子の契は一世といふことと」熊野の頭註に出づ。

○四鳥の別一「桓山之鳥生四子焉、翼既成、將分四海、其母悲而送之云々」（孔子家語類同篇）

○獨行き〳〵て武藏國と下總國との中にある大きなる河あり、それを角田河といふ、それの河のほとりにいむれば、やれば遠くもあれ來にけりかなと、わびあへるに、渡守はや舟に乗れ、日も暮れなむといふに

乗りて渡らむとするに、皆人もの さびしくて、京にしも あらず。白き鳥の嘴と脚とあかき、水の上にふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人しらず渡守に問ひければ「これなむ都鳥」といふを聞きて、「名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。（伊勢物語）

も暮れぬ舟に乗れとこそ承るべけれ。謡「かたの如くも都の者を、舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも、覚えぬ事を宣ひそよ。ワキ詞「げにく〳〵都の人とて、名にしなたも耳に留まるものを。彼の業平も此の渡りにて、謡「名にしおはば、いざこと問はん都鳥、我が思ふ人は有りやなしやと。詞「なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。ワキ詞「あれこそ沖の鴎候よ。シテ詞「うたてやな浦にては千鳥とも云へ鴎とも云へ、など此の隅田川にて白き鳥をば都鳥とは答へ給はぬ。ワキ謡「げにく〳〵誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ謡「沖の鴎とゆふ波の、ワキ謡「昔に返る業平も、シテ謡「有りや無しやとこと問ひしも、ワキ謡「都の人を思妻、シテ謡「わらはも東に思子の、ゆくへを問ふは同じ心の、ワキ謡「妻を忍び、シテ謡「子を尋ぬるも、ワキ謡「思ひは同じ、シテ謡「戀路なれば、地謡「我も又、いざ事とはん都鳥、我思子は東路に、有りやなしやと問へども〳〵、答へぬはうたて都鳥、鄙の鳥とやいひてまし。實に江これは又、隅田川の東までとては渡守、舟こぞりてせてたび給へ。ワキ詞「かゝる優しき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。此の渡りは大事の渡りにて候。かまひて靜に召され候へ。

ワキツレ詞「なうあの向ひの柳の下に、人の多く集まりて候は何事にて候ぞ。ワキ詞「さん候あれは大念佛にて候。それにつきて哀れなる物語の候。此の舟の向ひへ着き候はん程に語つて聞かせ申さうずるにて候。語リ「さても去年三月十五日、しかも今日に相當つて候。人商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買取つて奥へ下り候が、此の幼き者、いまだ習はぬ旅の疲れにや、以ての外に違例し、今

○ふなぎはふはりえのかはのみなきはにきるつゝなくはみやこどりかも。（萬葉、廿、家持）

○向ひの柳―舞臺に柳をつけたる作物を置く。

は一足も引かれずとて、此の河岸にひれふし候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ、此の幼き者をば其のまゝ路次に捨てて、商人は奥へ下つて候。さる間此の邊の人々、此の幼き者の姿を見候に、由ありげに見え候程に、さま〴〵に痛はりて候へども、前世の事にてもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、我は都北白河に、吉田の何某と申しゝ人の唯ひとり子にて候が、父には後れ母ばかりに添ひ參らせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうに成行き候。都の人の足手影もなつかしう候へば、此の道の邊りに築き籠めて、しるしに柳を植ゑてたまはれとおとなしやかに申し、念佛四五返稱へ、遂に事終つて候。なんぼう哀れなる物語にて候ぞ。見申せば船中にも少少都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が着いて候。とうとう御上り候へ。ワキッ

レ詞「如何さま今日は此の所に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうずるにて候。

ワキ詞「如何に是なる狂女、何とて船よりは下りぬぞ、急いで上り候へ。あらやさしや、今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。なう急いで舟より上り候へ。シテ詞「なう舟人、今の物語はいつの事にて候ぞ。ワキ詞「去年三月今日の事にて候。シテ詞「さて其の兒の年は。ワキ詞「十二歳。シテ詞「主の名は。ワキ詞「梅若九。シテ詞「父の名字は。ワキ詞「吉田の何某。シテ詞「さて其の後は親とても尋ねず。ワキ詞「親類とても尋ねこず。シテ詞「まして母とても尋ねぬよなう。ワキ詞「思ひもよらぬ事。シテ謡「なう親類とても、親とても、尋ねぬこそ理なれ。其の幼き者こそ、此の物狂が尋ねる子にては候へとよ。なう是は夢かやあらあさましや候。

ワキ詞「言語道斷の事にて候物かな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや、あら痛はしや候。かの

人の墓所を見せ申し候べし、こなたへ御出で候へ。

シテ謠「今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今は此の世になき跡の、しるしばかりを見る事よ。さても無慙や死の縁とて、生所を去つて東のはての、道の邊りの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、此の下にこそあるらめや。下歌地「さりとては人々此の土を、かへして今一度、此の世の姿を、母に見せさせ給へや。上歌地「殘りても、かひあるべきは空しくて、かひあるべきは空しくて、あるはかひなきはゝき木の、見えつ隠れつ面影の、定めなき世の習ひ、人間うれひの花盛、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲おほへり。實に目の前の憂き世かな、實に目の前の憂き世かな。

ワキ詞「今は何と御歎き候ひてもかひなき事、たゞ念佛を御申し候ひて後世を御とぶらひ候へ。謠「既に月出で河風も、はや更け過ぐる夜念佛の時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らし勤むれば、シテ謠「母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯ひれふして泣き居たり。

ワキ詞「うたてやな餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふべけれと、謠「鉦鼓を母に參らすれば。シテ謠「我子の爲と聞けばげに、此の身も鳧鐘を取り上げて ワキ謠「歎きをとどめ聲澄むや、シテ謠「月の夜念佛もろともに、ワキ謠「心は西へと一すぢに、シテ、ワキ二人謠「南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌陀佛、地「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ謠「隅田河原の波風も、聲立て添へて、地「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ謠「名にしおはば都鳥も音を添へて、地、子方謠「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

シテ詞「なう〳〵今の念佛の内に、正しく我子の聲の聞え候。此の塚の内にてありげに候よ。ワキ詞「我等、もさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をば止め候べし、母御一人御申し候へ。シテ謠「今一聲こそ聞か

○掩涙別鄉里、飄飄將遠行、茫茫綠野中、蕭蕭孤客情、驅馬上丘隴、高低路不平、風吹衆梨花、啼鳥時一聲、古墓何代人、不知姓與名、化作路傍土、年々春草生、感彼忽自悟、今我何營營、（白氏文集、卷二、諷喩）

○帶木の見えつ隱れつ「その原や伏屋に生ふる帶木のありとは見えてあはぬ君かな」（新古今集十一、坂上是則）

○生死長夜の一「未得眞覺、恒處夢中、故佛說爲生死長夜矣」（唯識論）

○南無や西方云々―龍舒淨土文卷四に出づる語による。「南謨西方極樂世界、三十六萬億、一一十萬九千五百、同名同號阿彌陀佛」

まほしけれ、南無阿彌陀佛。子謡「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、地「聲の内より、幻に見えければ、シテ謡「あれは我子か、子謡「母にてましますかと、地「互に手に手を取りかはせば、又消え消えとなり行けば、いよいよ思ひはます鏡、面影も幻も、見えつ隠れつする程に、東雲の空もほの〴〵と、明け行けば跡絶えて、我子と見えしは塚の上の、草茫々として唯しるしばかりの淺茅が原と、なるこそあはれなりけれ。

○今一聲こそ―「行きやらで山路くらしつ時鳥今一聲のきかまほしきに」（拾遺集巻二源公忠）

（八）俊寛　世阿彌作

ワキ　赦免の使
ツレ　丹波少將藤原成經
ツレ　平判官康頼
シテ　俊寛僧都

○俊寛―出所は平家物語巻三、赦し文、足揃

場所　薩摩國鬼界島
季節　九月

ワキ詞「これは相國に仕へ申す者にて候。さてもこの度中宮御産の御祈の爲に、非常の大赦行はるゝにより、國々の流人赦免ある、中にも鬼界が島の流人の内、丹波の少將成經、平判官康頼二人赦免の御使を承つて候間、只今鬼界が島へと急ぎ候。

ツレ二人次第謡「神を硫黄が島なれば、神を硫黄が島なれば、願も三つの山ならん。サシ謡「これは九州薩摩潟、鬼界が島の流人の内、成經謡「丹波の少將成經、康頼謡「平判官入道康頼、二人謡「二人が果にて候なり。我等都にありし時、熊野參詣三十三度の、歩をなさんと立願せしに、その半ばにも數足らで、かゝる遠流の身となれば、所願も空しくはやなりぬ。せめての事の餘りにや、この島に三熊野を勸請申し、都よりの道中の、九十九所の王子まで、下歌「悉く順禮の、神路に幣を捧げつゝ、上歌之を王子の社といふ

○相國―太政大臣の異名。平清盛を指す。
○中宮―高倉天皇の后建禮門院。
○鬼界が島―一名を硫黄島といふ。
○丹波少將成經―藤原成親の子、右近衛少將丹波守を兼ぬ。
○平判官康頼―檢非違使尉なれば判官と稱す。
○三つの山―紀伊國熊野の本宮・新宮・那智を三山といふ。
○三熊野を勸請―平家物語巻二康頼祝詞の條に出づ
○九十九所の王子―京都熊野間に九十九箇所の遙拜所あり。

○浦の濱木綿―「みくまの浦の濱木綿百重なす心は思へどもただにあはぬかも。」（萬葉集、巻四、相聞、柿本人麿）

○闇きより闇き道にぞ入りにける―「闇きより闇き道にぞ入りぬべき、遙に照らせ山の端の月。」（拾遺集、哀傷、和泉式部）

○玉兎曇眠る雲母の地―玉兎は月の異名、仙人は雲母を食ふ故にその住所を雲母の地といふ。

○金鷄夜宿す不萌の枝―金烏と金鷄とは日の異名で、以上二句は禁師頌にての禅門の意味を示すものといふ。

○寒蟬枯木を抱きて―「寒蟬抱ㇾ枯木一鳴盡不ㇾ回ㇾ頭。」（禅僧偈萬里詩集梅花無盡藏）

○俊寛―法勝寺の執行。

○竹葉―酒の異名。

○彭祖―前出。

○ぬれて千す山路に菊の―「ぬれてほす山路の菊の露の間にいつか千年を我は經む。」（古今集、秋、素性、法師）

○法勝寺―洛東、東三條森の北にあり。白河法皇の創建。

○法成寺―京極の東にあり。藤原道長の創建。近衛河原にあり。

○喜見城―天上界、帝釋天王の居城、宮城の四門に四大園ありて、善美を極め、慰樂盡きずといふ。

○五衰―前出。

○滅色―草木の色の變じ衰るゝをいふ。

○流るゝもまた涙川―「涙川なに水上を尋ねけむ、物思ふ時の我が身なりけり。」（古今集、戀、よみ人知らず）

○何々中宮御産の―この文言は、平家物

經しも、心を汲み得し深谷の水、上歌地謡「飲むからに、げにも藥と菊水の、げにも藥と菊水の、心の底も白衣の、濡れて干す、山路の菊の露の間に、我も千年を經る心地する。配所はさてもいつまでぞ。春過ぎ夏たけてまた、秋暮れ冬の來るをも、草木の色ぞ知らするや。あら戀しの昔や。思出は何につけても、あはれ都にありし時は、法勝寺法成寺、ただ喜見城の春の花、今はいつしか引きかへて、五衰滅色の秋なれや、落つる木の葉の盃、飲む酒は谷川の、流るゝも亦涙川、水上は我なるものを、物思ふ時しもは、今こそ限なりけれ。

ワキ一聲謡「早船の心にかなふ追風にて、舟子やいとゞ勇むらん。詞「いかにこの島に流され人の御座候か。都より赦免狀を持ちて候。シテ詞「あら有難や候。やがて康頼御覽候へ。急いで御拜見候へ。康頼詞「何々中宮御産の爲に、非常の大赦行はるゝにより、國々の流人赦免ある、中にも鬼界が島の流人の内、丹波の少將成經、平判官入

道康頼、二人赦免あるところなり。シテ詞「何とて俊寛をば讀み落し給ふぞ。康頼詞「御名はあらばこそ、赦免状の面を御覽候へ。シテ詞「さては筆者の誤か。ワキ詞「いや某都にて承り候も、康頼成経二人は御供申せ、俊寛一人をばこの島に殘し申せとの御事にて候。

シテ謡「こはいかに、罪も同じ罪、配所も同じ配所、非常も同じ大赦なるに、一人誓の網に漏れて、沈み果てなんことはいかに。クドキ謡「このほどは三人一所に有りつるだに、さも恐ろしく凄じき、荒磯島にたゞ一人、離れて海士の捨草の、波の藻屑の寄るべもなくて、あられんものかな。歎くにかひも落の千鳥、泣くばかりなる有様かな。

クセ地謡「時を感じては、花も涙を濺ぎ、別を恨みては、鳥も心を動かせりと。この島は、鬼界が島と聞くなれば、鬼ある所にて、今生よりの冥途なり。たとひ如何なる鬼なりと、このあはれなどか知らざらん。天地を動かし、鬼神も感をなすなるも、人のあはれなるものを、この島の鳥獣も、鳴くは我を弔ふやらん。シテ謡「せめて思の餘りにや、地謡「さきに讀みたる巻物を、また引開き同じあとを繰返し繰返し、見れども見れども、たゞ成経康頼と、書きたるその名ばかりなり。もしも禮紙にやあるらんと、巻返して見れども、僧都とも俊寛とも、書ける文字は更になし。こは夢かさても夢ならば、覺めよ覺めよと現無き、俊寛が有様を見るこそあはれなりけれ。

ワキ謡「時刻移りて叶ふまじ、成経康頼二人ははや、御船に召され候へとよ。成経康頼謡「かくてあるべき事ならねば、よその歎をふり棄てて、二人は船に乗らんとす。シテ詞「僧都も船に乗らんとて、康頼の袂に取附けば、ワキ謡「僧都は船に叶ふまじと、さも荒けなく言ひければ、シテ詞「うたてやな公の私といふことのあれば、せめては向ひの地までなりとも、情に乗せてたび給へ。ワキ謡「情も知らぬ舟子ども、櫓櫂を振上げ打たんとす。シテ謡「さすが命の悲しさに、また立歸り出船の、詞「纜に

語覺一本には「重科免二遠流一早可レ成二歸洛思一、依二中宮御産御祈一被レ行二非常赦一、然間鬼界島流人少將成經、康頼法師赦免。」と見え、「源平盛衰記」には、「依二中宮御産御祈一被レ行二非常大赦之内一、薩摩方硫黄島流人丹波少將成經、井平判官康頼法師可二歸洛一之由、御氣色候所也仍執達如レ件。」とあり。

○時を感じては―「國破山河在、城春草木深、感レ時花濺レ涙、恨レ別鳥驚レ心、烽火三月連、家書抵二萬金一、白頭搔更短、渾欲レ不レ勝レ簪。」（春望詩杜甫）

○天地を動かし鬼神も感をなす―「動二天地一感二鬼神一、化二人倫一於和二夫婦一、莫レ宜二於和歌一。」（古今集、漢文序、紀淑望）

○證紙―書狀の文言を記したる紙の上を巻く別の白紙。その上に更に包紙を用ふ

取附き引留むる。ワキ詞「舟人纜押切つて、船を深みに押出す。シテ謠「せん方波に搖られながら、たゞ手を合せて船よなう。ワキ謠「船よといへど乘せざれば、シテ謠「力及ばず俊寛は、地謠「もとの渚にひれ伏して、松浦佐用姫も、我が身にはよも增さじと、聲も惜しまず泣き居たり。

ワキ、ツレ三人ロンギ謠「痛はしの御事や、我等都に上りなばよきやうに申し直しつゝ、やがて歸洛はあるべし。御心强く待ち給へ。シテ謠「歸洛を待てよとの、呼ばはる聲も幽なる、賴みを松陰に、音を泣きさして聞き居たり。ワキ、ツレ三人謠「聞くやいかにと夕波の、皆聲々に俊寛を、シテ謠「申し直さばほどもなく、三人謠「必ず歸洛あるべしや。シテ謠「これは眞か。三人謠「なかなかに、シテ謠「賴むぞよ賴もしくて、地謠「待てよ待てよといふ聲も、姿も、次第に遠ざかる沖つ波の、幽なる聲絶えて、船影も人影も、消えて見えずなりにけり、跡消えて見えずなりにけり。

○松浦佐用姫―大伴佐提比古良子、特被朝命奉使蕃國、艤棹言歸稍赴蒼波、妾也松浦佐用嬪面、嗟此別易、歎彼會難、即登高山之嶺、遙望離去之船、悵然斷腸、黯然銷魂、遂脫領巾麾之、傍者莫不流涕、因號此山曰領巾麾之嶺也。」（萬葉集卷五、詠領巾麾嶺歌の序）

○松陰に音を泣き―「聞くやいかに、うはの空なる風だにも、松に音するならひありとは。」（新古今集、戀、宮內卿）

○小次郎―世阿彌の甥、音阿彌の子信光。

○船辨慶―出所は義經記卷四義經都落の事、平家物語卷十二判官都落の事等。

（九）船辨慶

觀世小次郎作

前シテ　靜
後シテ　平知盛靈
子方　判官源義經
ワキ　武藏坊辨慶
ワキツレ　從者（三人）
狂言　船頭
場所　前津の國大物浦　後播磨洋の海上
季節　十一月

ワキワキツレ次第謠「今日思ひ立つ旅衣、今日思ひ立つ旅衣、歸洛をいつと定めん。ワキ詞「かやうに候者は、西塔の傍に住居する武藏坊辨慶にて候。さても我君判官殿は、賴朝の御代官として平家を亡ぼし給ひ、御

兄弟の御中日月の如く御坐候べきを、ゆひがひなきものの讒言により、御中たがはれ候事、かへすゞ〳〵も口惜き次第にて候。然れども我君親兄の禮を重んじ給ひ、一まづ都を御開きあつて、西國の方へ御下向あり、御身に過りなき通りを御歎き有るべき爲に、今日夜をこめ淀より御船に召され、津の國尼が崎大物の浦へと急ぎ候。

ワキ、ワキツレ、サシ謡「頃は文治の初つ方、賴朝義經不會の由、既に落居しの、道狹くならぬ其の先に、西國の方へと力なく、判官謡「判官都を遠近の、心ざし、ワキ、ワキツレ謡「まだ夜深くも雲井の月、出づるも惜き都の名殘、ひとゝせ平家追討の、都出には引きかへて、唯十餘人すご〳〵と、さも疎からぬ友舟の、下歌「上りくだるや雲水の身は定めなきならひかな。上歌「世の中の、人は何とも石清水、清み濁るをば神ぞ知るらんと、高き御影を伏し拜み、行けば程なく旅心、潮も波も共に引く、大物の浦に著きにけり大物の浦に著きにけり。

○世の中の人は一日本風土記に出でたる歌。石清水八幡の神詠ともいひ傳ふ。

ワキ詞「御急ぎ候程に、これははや大物の浦に御著きにて候。某存じの者の候間、御宿の事を申し付けうずるにて候。如何に此の屋のあるじの渡り候か。狂言「誰にて御入り候ぞ。ワキ詞「いや武藏にて候。狂言「さて只今は何の爲の御いでにて候ぞ。ワキ詞「さん候、我君を是まで御供申して候、御宿を申し候へ。狂言「さらば奥の間へ御通り候へ、御用心の事は、御心安く思しめされ候へ。

ワキ詞「如何に申し上げ候。恐れ多き申し事にて候へども、正しく靜は御供と見え申して候。今の折節何とやらん似合はぬ樣に御座候へば、あつばれ是より御かへしあれかしと存じ候。判官詞「ともかくも辨慶はからひ候へ。ワキ詞「畏つて候。さらば靜の御宿へ參りて申し候べし。

ワキ詞「いかに此の屋の内に靜の渡り候か。君よりの御使に武藏が參じて候。シテ詞「武藏殿とはあら思ひよらずや。何のための御使に

て候ぞ。ワキ詞「さん候、唯今參る事餘の儀にあらず。我君の御詫には、是までの御參り返す〳〵も神妙に思しめし候、去りながら、唯今は何とやらん似合はぬやうに御座候へば、是より都へ御歸りあれとの御事にて候。シテ詞「是は思ひもよらぬ仰せかな、いづくまでも御供とこそ思ひしに、謡「頼みても頼みなきは人の心なり、あら何共なや候。ワキ詞「仰せ尤もにて候。さて御返事をば何と申し候べき。シテ詞「自ら御供申し、君の御大事になり候はば留まり候べし。ワキ詞「あら事々しや候。たゞ御とまり有るが肝要にて候。シテ詞「よく〳〵物を案ずるに、これは武藏殿の御はからひと思ひ候程に、わらは參り直に御返事を申し候ふべし。ワキ詞「それはともかくもにて候。さらば御參り候へ。

ワキ詞「如何に申し上げ候、靜の御參りにて候。判官詞「いかに靜、此の度思はずも落人となり落ち下る所に、是までは〳〵來るこゝろざし、かへすく〳〵も神妙なり、さりながら、遙々の波濤を凌ぎ下らん事、しかるべからず。先此の度は都にのぼり、時節を待ち候へ。シテ詞「さては誠に我君の御詫にて候ぞや。よしなき武藏殿を恨み申しつる事の恥かしさよ。謡「返すく〳〵も面目なうこそ候へ。ワキ詞「いや〳〵是は苦しからず候。唯人口を思しめすなり。謡「御心變るとな思召しそと、涙を流し申しけり。シテ謡「いやとにかくに數ならぬ、身には恨もなけれども、是は舟路の門出なるに。地歌「涙風も靜を留め給ふかと、靜を留め給ふかと、涙を流し木綿四手の、神かけて變はらじと、契りし事も定めなや。げにや別れよりはんとぞ思ふ行末。

判官詞「如何に辨慶、靜に酒をすゝめ候へ。ワキ詞「畏つて候。げにげに是は御門出の、行末千代ぞと菊の盃、謡「靜にこそはすゝめけれ。シテ謡「妾は君の御別れ、やる方なさにかきくれて、涙にむせぶばかりなり。

○別れより一別れよりまさりて惜しき命かな君に二度逢はんと思へば（千載集、別、公任）

ワキ詞「いや〳〵これは苦しからぬ、旅の舟路の門出の和歌、謡「唯一さ
しと勧むれば。シテ謡「其の時靜は立ち上り、時の調子を取りあへず、渡
口の郵船は風靜まつて出づ。地謡「波頭の謫所は日晴れて見ゆ。

ワキ詞「是に烏帽子の候、めされ候へ。シテ謡「立ち舞ふべくもあらぬ身
の、地謡「袖打ち振るも恥かしや。シテ謡「傳へ聞く陶朱公は勾踐を伴な
ひ、地謡「會稽山にこもりゐて、種々の智略をめぐらし、終に呉王を亡ぼ
して、勾踐の本意を達すとかや。クセ謡「しかるに勾踐は、二度代を取り、
會稽の恥を雪ぎしも、陶朱功を成すとかや。されば越の臣下にて、政
を身にまかせ功名富み貴く、心のごとくなるべきを、功成り名遂げて
身退くは、天の道と心得て小船に棹さして、五湖の遠島をたのしむ。
シテ謡「かゝる例も有明の、地謡「月の都をふりすてて、西海の波濤にお
もむき、御身の科のなきよしを、歎き給はば頼朝も、終にはなびく青柳
の枝を連ぬる御ちぎり、などかは朽ちし果つべき。地謡「唯たのめ。

○時の調子―後出山姥の頭註參照。
○渡口の郵船―渡口郵船風定出波頭謫所日晴看（和漢朗詠集、行旅、野相公）
○立舞ふべくもあらぬ身―物思ふに立舞ふべくもあらぬ身の袖うち振りし心知りきや（源氏物語、紅葉賀）
○功成り名遂げて―「富貴而驕、自遺其咎、功成名遂身退天之道」（老子第九）
○遠島―蓬萊か。

シテ謡「唯頼めしめぢが原のさしも草、地謡「我世の中にあらん限りは。
シテ謡「かく尊詠の偽りなくは、地謡「かく尊詠の偽りなくは、やがて御
代に出舟の、船子どもはや纜をとく〳〵と、はや纜をとく〳〵と、すゝ
め申せば判官も、旅の宿りを出で給へば、シテ謡「靜は泣く〳〵、地謡「烏
帽子直垂ぬぎ捨てゝ涙にむせぶ御別れ、見る目もあはれなりけり、見
る目もあはれなりけり。（中入）

ワキツレ詞「靜の心中察し申して候。やがて御舟を出ださうずるにて候。
ワキ詞「何事にて候ぞ。ワキツレ詞「君よりの御諚
には、今日は涙風あらく候程に、御逗留と仰せ出だされて候。ワキ詞「何
と御逗留と候や。ワキツレ詞「さん候。ワキ詞「これは推量申すに靜に名殘
を御惜みあつて、御逗留と存じ候。先御思案有つて御覽候へ。今此
の御身にてかやうの事は、御運も盡きたると存じ候。其の上一年渡
邊福島を出でし時は、以ての外の大風なりしに、君御舟を出だし、平家

○唯たのめしめぢが原のさしも草―なほ願めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらむ限りは（新古今集、釋教、清水觀音御歌）
○一年、渡邊福島を出でし時―元暦二年二月の事、東鑑四平家物語十一に詳し。

を亡ぼし給ひし事、今以て同じ事ぞかし。謡「急ぎ御舟を出だすべし。
ワキツレ謡「げに〳〵是は理なり、いづくも敵と夕浪の、ワキ謡「立ち騒ぎ
つゝ舟子ども、地謡「えいや〳〵と夕汐に、つれて舟をぞ出だしける。
ワキ詞「あら笑止や風が變つて候。あの武庫山おろし弓弦羽が嶽よ
り吹きおろす嵐に、此の御舟の陸地に著くべき様もなし。皆々心中
に御祈念候へ。ワキツレ詞「いかに武藏殿、此の御舟にはあやかしが付い
て候。ワキ詞「あゝ、暫く。さやうの事をば船中にては申さぬ事にて候。
謡「あら不思議や海上を見れば、西國にて亡びし平家の一門、おのお
の浮み出でたるぞや。かゝる時節を伺ひて恨みをなすも理なり。
判官詞「いかに辨慶。ワキ詞「御前に候。判官詞「今更おどろくべからず。た
とひ悪靈恨みをなすとも、そも何事の有るべきぞ。謡「悪逆無道の其
の積り、神明佛陀の冥感に背き、天命に沈みし平氏の一類、地謡「主上を
始め奉り、一門の月卿雲霞の如く、波に浮びて見えたるぞや。

後ジテ謡「抑是は、桓武天皇九代の後胤、平の知盛幽靈なり。詞「あらめ
づらしやいかに義經、思ひもよらぬ浦浪の、地謡「聲をしるべに出舟の、
聲をしるべに出舟の、シテ謡「知盛が沈みし其の有様に、地謡「又義經を
も海に沈めんと、夕浪に浮べる長刀執り直し、巴浪の紋、あたりを拂ひ、
潮を蹴立て悪風を吹きかけ、眼もくらみ、心もみだれて、前後を忘ずる
ばかりなり。判官謡「その時義經少しもさわがず。地謡「その時義經少
しもさわがず、打物抜き持ち、うつゝの人に向ふが如く、言葉をかはし
戰ひ給へば、辨慶おしへだて、打物わざにて、叶ふまじと、珠數さら〳〵
と押しもんで、東方降三世、南方軍荼利夜叉、西方大威德、北方金剛夜叉
明王、中央大聖不動明王の索にかけて、祈り祈られ、悪靈次第に遠ざか
れば、辨慶舟子に力を合はせ、御船を漕ぎのけ汀によすれば、尚怨靈は
暮ひ來るを、追ひはらひ祈りのけ、又引く汐にゆられ流れ、また引く汐
にゆられながれて、跡白波とぞなりにける。

○禪竹―能役者金春氏信。

○山姥―俗説を本とし、曲舞の言葉を取つて作る。

○善き光ぞと―善光寺の名を暗示す。

○曲舞―鎌倉室町時代に流行したる舞の一種。

（一〇）山姥

世阿彌作
一説禪竹作

ツレ　遊女
ワキ　遊女の從者
ワキツレ　供人（三人又は四人）
前シテ　山住の女
後シテ　山姥
場所　越後國上路山
季節　不定

ワキ、ワキツレ次第謠「善き光ぞと影頼む、善き光ぞと影頼む、佛の御寺尋ねん。ワキ詞「これは都方に住居仕る者にて候。またこれに渡り候御事は、百魔山姥とて、隱れなき遊女にて御座候。かやうに御名を申すいはれは、山姥の山廻するといふことを、曲舞に作つて御謠ひあるにより京童の申し慣はして候。またこの頃は善光寺へ御參ありたき由承り候ほどに、某御供申し、只今信濃の國善光寺へと急ぎ候。ワキサシ謠「都を出でてさゝ波や、志賀の浦船漕がれ行く、末は有乳の山越えて、袖に露散る玉江の橋、かけて末ある越路の旅、思ひやるこそ遙なれ。ワキ、ワキツレ上歌謠「梢波立つ汐越の、梢波立つ汐越の、安宅の松の夕煙、消えぬ憂身の罪を斬る、彌陀の劍の礪波山、雲路うながす三越路の、國の末なる里問へば、いとゞ都は遠ざかる、境川にも着きにけり、境川にも着きにけり。

ワキ詞「御急ぎ候ほどに、これははや越後越中の境川に御着きにて候。暫くこれに御座候ひて、なほ〳〵道の樣體をも御尋ねあらうずるにて候。（狂言「シカ〳〵）

ツレ詞「げにや常に承る、西方の淨土は十萬億土とかや。これは又彌陀來迎の直路なれば、上路の山とやらんに參り候べし。謠「とても修

○有乳の山―越前國敦賀郡、近江との境にて關のありし所。

○玉江の橋―越前國足羽郡淺水にあり。

○汐越―越前國坂井郡濱坂の邊に汐越の松といふ名木ありきといふ。

○安宅の松―加賀國能美郡安宅町の東に根上り松といふ名木の遺跡あり。

○彌陀の劍―「利劍即是彌陀號、一聲稱念罪皆除（善導觀無量壽經疏）

○礪波山―越中國西礪波郡にあり、加賀との境。

○境川―越中國下新川郡境村と越後國西頸城郡市振との間。

○狂言「シカ〳〵」―ワキが狂言を呼出し道を問ふと、狂言「是より善光寺への道あまた御座候中にも上道下道あげろ越と申して御座候が、此あげろ越は、如來の踏み分け給ひたる道

行の旅なれば、乗物をばこれに留め置き、徒跣にて參り候べし。道しるべしてたび候へ。（狂言「シカ〳〵」）

ワキ詞「あら不思議や、暮るまじき日にて候が俄に暮れて候よ。さてなどか中々かなはぬ道にて候」といふ。ツレこの通りをツレにいふ。

何と仕り候べき。

（呼掛）シテ謡「なう〳〵旅人御宿參らせうなう。詞「これは上路の山とて人里遠き所なり。日の暮れて候へば、妾が庵にて一夜を明させ給ひ候へ。ワキ詞「あら嬉しや候。俄に日の暮れ前後を忘じて候。やがて參らうずるにて候。シテ謡「今宵の御宿參らすること、とりわき思ふ仔細あり。詞「山姥の歌の一節謡ひて聞かさせ給へ。年月の望なり、鄙の思出と思ふべし。謡「その爲にこそ日を暮し、御宿をも參らせて候へ。いかさまにも謡はせ給ひ候へ。ワキ詞「これは思ひもよらぬことを承り候ものかな。さて誰と見申されて、山姥の歌の一節とは御所望候ぞ。シテ詞「いや、何をか包み給ふらん。あれにまします御事は、

○彌陀來迎の直路―阿彌陀如來を信ずる者の臨終の時、如來が來り迎へて極樂へ導かれる道に當る意。但しこゝは、善光寺への途をいふ。又市振附近に淨土村ありそれをもいひ含めたり。

○上路の山―越後國四頸城郡にある親不知の嶺をいふ。

○次第―曲舞のはじめにある曲名。

百魔山姥とて隱れなき遊女にてはましまさずや。まづこの歌の次第とやらんに謡「よし足引の山姥が、山廻すると作られたり。あら面白や候。詞「これは曲舞に依りての異名、さて眞の山姥をば、如何なる物とか知し召されて候ぞ。ワキ詞「山姥とは山に住む鬼女とこそ曲舞にも見えて候へ。シテ詞「鬼女とは女の鬼とや。よし鬼なりとも人なりとも、山に住む女ならば、妾が身の上にてはさむらはずや。謡「年頃色には出ださせ給ふ、言の葉草の露ほども、御心には掛け給はぬ、詞「恨み申しに來りたり。謡「道を極め名を立てて、世情萬德の妙花を開くこと、この一曲の故ならずや。然らば妾が身をも弔ひ、舞歌音樂の妙音の、聲佛事をもなし給はば、などか妾も輪廻を遁れ、歸性の善所に至らざらんと、恨を夕山の、鳥獸も鳴きそへて、聲を上路の山姥が、靈鬼これまで來りたり。

ツレ謡「不思議の事を聞くものかな。さては眞の山姥の、これまで來

○十萬億土―娑婆から極樂淨土に至る間にありといふ佛土の數。「從レ是西方、過二十萬億土一、有二世界一、名曰二極樂一。（阿彌陀經）

○彌陀來迎の直路―阿彌陀如來を信ずる者の臨終の時、如來が來り迎へて極樂へ導かれる道に當る意。但しこゝは、善光寺への途をいふ。又市振附近に淨土村ありそれをもいひ含めたり。

○上路の山―越後國四頸城郡にある親不知の嶺をいふ。

○擊佛事―讀經歌謡音樂など、擊を以て佛に手向くる事。

○歸性の善所―迷ひなき本性に立歸つて赴く極樂淨土。

り給へるか。シテ詞「我國々の山廻り、今日しもこゝに來ることは、我が名の德を聞かん爲なり。謠ひ給ひてさりとては、我が妄執を晴らし給へ。ツレ謠「この上はとかく辭しなば恐ろしや、もし身の爲や惡しかりなんと、憚りながら時の調子を、取るや拍子をすゝむれば、シテ詞「しばさせ給へ、とてもさらば、暮るゝを待ちて月の夜聲に、謠ひ給はば我もまた、眞の姿を現はすべし。謠「すはやかげろふ夕月の、上歌「さなきだに、暮るゝを急ぐ深山邊の、地謠「暮るゝを急ぐ深山邊の、雲に心をかけ添へて、この山姥が一節を、夜すがら謠ひ給はば、その時我が姿をも、あらはし衣の袖つぎて、移舞を舞ふべしと、いふかと見れば、そのままかき消すやうに失せにけり、かき消すやうに失せにけり。（中入、間）ツレ謠「餘りの事の不思議さに、更に眞と思ほえぬ、鬼女が詞を違へじと、ワキ上歌待謠「松風共に吹く笛の、松風共に吹く笛の、聲澄渡る谷川に、手まづ遮る曲水の、月に聲澄む深山かな、月に聲澄む深山かな。

○時の調子―時節に適應した音樂の調子時の聲といふも同じ「時のこゑといふことあり春は雙調、夏は黃鍾調、秋は平調冬は盤涉調、壹越調は中央なり。」（龍鳴抄）

○移舞―舞の形の名シテとツレと相舞になるやうなる仕組。

○手まづ遮る曲水の―前出。

○寒林に骨を打つ靈鬼―「昔有レ人在二道上一行見二道有一死人一、鬼神以レ杖鞭レ之行人問言、此人已死何故鞭レ之。鬼神言、是我故身。在生之日不レ孝二父母一、事レ君不レ忠、不レ敬二三尊一、不レ隨二師父之教一、令二我墮一レ罪苦痛難レ言、悉我故身之爲。故來鞭耳。稍々前行、復見二一死人一。天神來下散二華於死人屍上一、以レ手摩二抄之一行人問言觀レ君似二是天一、何故二摩二抄是死屍一。答曰、是我故身、生時之日、孝二順父母一、忠信事レ君、奉二敬三尊一、承二受師父之教一、令二我神得一レ生レ天皆是故身之恩。是以來報レ之耳。」（阿育王譬喩經）

「溫野に骨を禮せし天人は、平生の善を喜び、寒林に骸を打ちし靈鬼は、前生の惡を悲しむとも斯樣の事をや申すべき。」（平治物語卷二、信頼降參並最期の事）

○山また山何れの工か―「山復山、何工削二成青巖之形一、水復水、誰家染二出碧潭之色一。」（和漢朗詠集、雜、山水策、大江澄明）

後ジテ一聲謠「あら物凄の深谷やな、あら物凄の深谷やな。寒林に骨を打つ靈鬼、泣く泣く前生の業を恨む。深野に花を供ずる天人、返す返すも歸性の善を悅ぶ。いや善惡不二、何をか恨み何をか悅ばんや。萬箇目前の境界、懸河渺々として、巖峨々たり。山また山、何れの工か青巖の形を削りなせる、水また水、誰が家にか碧潭の色を染出せる。ツレ謠「恐ろしや月も木深き山陰より、その樣化したる顏ばせは、その山姥にてましますか。シテ詞「とてもはや穗に出初めし言の葉の、氣色にも知し召さるべし。我にな恐れ給ひそとよ。ツレ謠「この上は恐ろしながらうば玉の、闇紛れより現はれ出づる、姿詞は人なれども シテ詞「髮には荊棘の雪を戴き、ツレ謠「眼の光は星の如し。シテ謠「さて面の色は、ツレ謠「さ丹塗の、シテ謠「軒の瓦の鬼の形を、ツレ謠「今宵始めて見ることを、シテ謠「何にたとへん、ツレ謠「古の、上歌地謠「鬼一口の雨の夜に、鬼一口の雨の夜に、神鳴騷ぎ恐ろしき、その夜を思ひ白玉か、何ぞと

○鬼一口の雨の夜に―「昔男ありけり……辛うじて女の心あはせて、ぬすみ出でて、いとくらきにゐて往きけり。芥川といふ河をいきければ草の上におきたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆくさきおほく夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたうふりければ、あばらなる藏に、女をば奥におし入れて男は弓胡籙を負ひて戸口に居り。はや夜も明けなむと思ひつゝ居たりけるに、鬼はや一口にくひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴る騷ぎにえ聞かざりけり。やう〳〵夜も明けゆくに、見ればゐて來し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。「白玉かなにぞと人のとひし時露と答へ

問ひし人までも、我が身の上になりぬべき、浮世語も恥かしや、浮世語も恥かしや。

シテ詞「春の夜の一時を千金に換へじとは、花に清香月に陰、これは願のたまさかに、行逢ふ人の一曲の、その程もあたら夜に、はや〳〵謠ひ給ふべし。ツレ謠「げにこの上はともかくも、いふに及ばぬ山中に、シテ詞「一聲の山鳥、羽を敲く。ツレ謠「鼓は瀧波、シテ謠「袖は白妙、ツレ謠「雪を廻らす木の花の、シテ謠「何はのことか、ツレ謠「法ならぬ。次第地謠「よし足引の山姥が、よし足引の山姥が、山廻するぞ苦しき。

シテクリ謠「それ山といつぱ、塵泥より起つて、天雲かゝる千丈の峰、地謠「海は苔の露よりしたゞりて、波濤を疊む萬水たり、シテサシ謠「一洞空しき谷の聲、梢に響く山彦の、地謠「無聲音を聞くたよりとなり、聲に響かぬ谷もがなと、望みしもげにかくやあらん。シテ謠「ことに我が住む山家の景色、山高うして海近く、谷深うして水遠し。地謠「前には海水瀼

てきえなましものを」（伊勢物語）

○春の夜の一時を―「春宵一刻價千金、花有清香、有月陰。歌管樓臺人寂々、鞦韆院落夜沈々」（春夜、蘇東坡）

○一聲の山鳥―「一聲山鳥曉雲外、萬點水螢秋草中。」（和漢朗詠集、雜、郭公、許渾）

○何はのことか法ならぬ―「津の國のなにはのことか法ならぬ、遊び戯れまふとこそきけ。」（後拾遺集、釋教、遊女宮木）

○塵泥より起つて―「泰山不讓土壤、故能成其高、河海不厭細流、故能成其深。」（和漢朗詠集、雜、山水、李斯）

「高き山も麓のちりひぢよりなりて、あま雲たなびくまでおひのぼれる（古今集序）

○無聲音を聞くたより―「視乎冥々、聞

々として、月眞如の光をかゝげ、後には嶺松巍々として、風常樂の夢を破る。シテ謠「刑鞭蒲朽ちて螢空しく去る。地謠「諫鼓苔深うして、鳥驚かずともいひつべし。

クセ地謠「遠近のたづきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥の聲凄き折々に、伐木丁々として、山更に幽なり。法性峰聳えては、上求菩提を現はし、無明谷深き粧は、下化衆生を表はして、金輪際に及べり。そも〳〵山姥は、生所も知らず宿もなし。たゞ雲水を便にて、至らぬ山の奥もなし。シテ謠「然れば人間に非ずとて、地謠「隔つる雲の身をかへ、假に自性を變化して、一念化生の鬼女となつて、目前に來れども、邪正一如と見る時は、色卽是空そのまゝに、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり、柳は綠花は紅の色々。さて人間に遊ぶ事、或時は山賤の、樵路に通ふ花の陰、休む重荷に肩を貸し、月諸共に山を出で、里まで送る折もあり。また或時

は織姫の、五百機立つる窓に入つて、枝の鶯絲繰り、紡績の宿に身を置き、人を助くる業をのみ、賤の目に見えぬ、鬼とや人のいふらん。シテ謠「世を空蟬の唐衣、地謠「拂はぬ袖に置く霜は、夜寒の月に埋もれ、打ちすさむ人の絶間にも、千聲萬聲の、砧に聲のしでうつは、たゞ山姥が業なれや。都に歸りて、世語にせさせ給へと思ふは、なほも妄執か。唯うち捨てよ何事も、よし足引の山姥が、山廻するぞ苦しき。

シテ謠「足引の、地謠「山廻、（立廻）シテ謠「一樹の陰一河の流、みなこれ他生の緣ぞかし。ましてや我が名を夕月の、浮世を廻る一節も、狂言綺語の道すぐに、讃佛乘の因ぞかし。あら御名殘惜しや、暇申して歸る山の、地謠「春は梢に咲くかと待ちし、シテ謠「花を尋ねて山廻、地「秋はさやけき影を尋ねて、シテ謠「月見る方にと山廻、地謠「冬は冴え行く時雨の雲の、シテ謠「雪を誘ひて山廻、地謠「廻り廻りて、輪廻を離れぬ、妄執の雲の、塵積つて山姥となれる、鬼女が有樣見るや見るやと、峰に翔り谷

乎無聲、冥々中獨見ㇾ曉焉、無聲之中猶聞ㇾ和焉矣」（莊子、天地篇）

○前には海水瀁々として―「前には、海水瀁々として、月、眞如の光を浮べ、後には、巖松森々として、風、常樂の響を奏す。雲東天にはれ、波西海に靜なり。まことに、三尊來迎の儀式もたよりあり、九品往生の望たりぬべし。けいべんがまくちて、螢むなしく去る。諫鼓苔深うして、鳥驚かずとぞかゝれける。」（長門本平家物語卷六）

「刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不ㇾ驚。」（和漢朗詠集、雜、無爲治詩、大江音人）

○遠近のたづきも知らぬ―「遠近のたづきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥かな。」（古今集、春、よみ人知らず）

○伐木丁々として―「春山無ㇾ伴獨相求、伐木丁々山更幽。」（題二張氏隱居一、杜甫）

○金輪際―須彌山の最下底たる拾輪に接する處。水面下八萬四千由旬。

○色卽是空―「色」とは有形の萬物をいふ「色不ㇾ異ㇾ空空不ㇾ異ㇾ色、色則是空、空卽是色、夢想行識亦復如ㇾ是矣。」（般若心經）

○煩惱あれば菩提あり―「菩薩未二成佛一時、以二菩提一爲二煩惱一、菩薩成佛時、以二煩惱一爲二菩提一。」（仁王經）

○柳は綠花は紅―「見不ㇾ及處、江山滿目不ㇾ覩二纖毫一、花紅柳綠、白雲出沒本無心、江海滔々豈盈縮。」（禪林類聚經敎章）

「柳綠花紅眞面目」（蘇軾）

○織姫の五百機立つる―「棚機の五百機立てゝ織る布の秋去り衣たれかとり見に響きて、今までこゝにあるよと見えしが、山また山に山廻、山また山に山廻して、行方も知らずなりにけり。

○千聲萬聲の砧―「誰家思婦秋擣帛月苦風凄砧杵悲八月九月正長夜千聲萬聲無了時應到天明頭盡白一聲添得一莖絲」（白氏文集、十九、聞夜砧）

○一樹の陰一河の流―「前出。三人法師頭註參照。

○狂言綺言の道すぐに―「願以二今生世俗文字之業、狂言綺言之誤一、誦爲二當來世々讃佛乘之因、轉法論之緣。」（和漢朗詠集、佛事、香山寺、白居易）

○佛乘―「如來、以二一乘實相之法一運二諸衆生一到二涅槃彼岸一。故名二佛乘一。」（大藏法數）

○時雨の雲の―「旅衣しぼると告げよ、村時雨、都の方の山めぐりせば。」（續後撰集、羇旅、法印覺寛）

「なら柴の旅の庵をおとづれて、時雨も今ぞ山めぐりする。」（住吉歌合）

狂言

（一）萩大名

○萩大名―狂言記巻一に出づ。

大名
冠者
亭主

△大名「罷出でたるは、隠れもない大名。此の中御前に詰めてあれば、心が何とやら屈してござる。太郎冠者を呼出し、何方へぞ、遊山に参らうと存ずる。あるかやい。△冠者「御前に。△大名「汝を喚び出すは別義ではない、何方へぞ遊山に行かうと思ふが、何とあらう。△冠者「は、内内は御意なうても申し上げたう存ずるところに、一段でござりまする。△大名「よからうな。△冠者「は△大名「何と、西山東山はいつもの事。

様子の違つた所へ行きたいが、何處許がよからうな。△冠者「實に御意の通り、西山東山はいつもの事でござる。されば何處許が好うござりませうぞ。はあ、思ひ付けてござる。これよりも下京邊に、心やさかたな御方がござる。殊の外の庭好きでござる。これへの御遊山が好うござりませう。△大名「おう、これが一段よかろ。それへ向けて行かうぞ△冠者「は、さりながらこれへござれば、お歌をなされねばなりませぬ。△大名「それは如何やうな事を詠むぞ。△冠者「三十一文字の言の葉を、傳へた事でござる。△大名「あゝこりや、なるまいわい。△冠者「は、申し上げまする。△大名「何とした。△冠者「某上京邊を通つてござれば、若い衆の見物にござらうとあつて、萩の花に付いて、句づくろひをなされたを、聞いて參りましてござる。御前に敬へませう。△大名「やい冠者、その庭にも萩の花があらうかな。△冠者「殊に亭主すきまするのが、萩でござりまする。△大名「ふん、その義ならば、急いで敬へい。

△冠者「畏つてござる。七重八重九重とこそ思ひしに、とよ咲き出づる萩の花かなと、申す事でござる。△大名「ふん、してそればかりか。△冠者「はあ。△大名「いやこれほどの事ならば詠まうほどに急いで來い。△冠者「畏つてござる。△大名「來い、來い。やい、冠者、して今の歌のいひ出しは何であつたぞ。△冠者「忘れさつしやれてござるか。七重八重でござりまする。△大名「おうそれぢや。してその後は。△冠者「申し、殿樣、これではなりますまい。△大名「おう、なるまいわい。急いで戻れ。△冠者「申し、殿樣。△大名「何ぢや。△冠者「さりながら物によそへたら、覺えさつしやれませうか。△大名「よそへ物によつて覺えうず。△冠者「すなはち扇の骨によそへませう。七重八重と申す時に、七本八本廣げませう。九重と申す時に、九本廣げませう。とよ咲きと申す時に、皆廣げませう。△大名「おう、これはよそへ物ぢやわい。やい、して又その後があるぞよ。△冠者「はあ、これは猶よそへ物がござる。△大名「それは何によそへるぞ。△冠者「すなはち身共をば、臑脛ばかり伸び居つてと、厚く折檻なされまする。その脛をば、思ひ出さつしやれませう。△大名「おう、これが一段ぢや。來い、來い。

△冠者「疾とござりました。すははちこれでござりまする。それに待たしやれませ。△大名「やい、亭主に、大名ぢや程に迎に出よと云へ。△冠者「畏つてござる。御亭、内にござるか。△亭主「え、くわじや殿、何としてござつたぞ。△冠者「その事でござる。頼うだ人が、此方の庭を聞及うで、見物にでござるほどに、表へ迎に出さつしやれい。△亭主「心得ましてござる。はつ、これは、又、見苦しい所へ、御腰掛けられうとござりまする。辱なうこそござりますれ。△大名「やい、くわじや、ありや亭主か。△冠者「はあ。△大名「御亭、不案内におぢやる。かう通りまする。

△亭主「はつ。△大名「やい、太郎冠者、床几々々。△冠者「はつ。△大名「やい、亭主に、これへ出られいといへ。△冠者「はつ、御亭これへ出さつしやれい。

△亭主「畏つてござる。△大名「御亭々々、聞及うだよりも、いかう庭が見事でおぢやる。△亭主「はつ、このぢうは手入もいたさぬによつて、いかう穢うござりまする。△大名「いや〳〵、さうもおぢやらぬいの。なう御亭、あの向ふな松は、女松でおぢやるか、男松でおぢやるか。△亭主「いや、あれは男松でござりまする。△大名「ふん、いかう見事おぢやる。やい、冠者見事な。△冠者「はつ。△大名「あの左の方へすつと出た枝を見たか。△冠者「なか〳〵、見ましてござる。△大名「鋸おくせい、引切つて心に立てうに、△冠者「はゝゝ。△大名「は、御亭、不案内におぢやる。

△亭主「これ〳〵。△冠者「何でござるぞ。△亭主「いや、彼の殿様に仰しやれませうには、いづれもの御腰掛けられては、あの萩の花につけて、短冊を掛けさつしやる。殿様にも遊ばしませいと仰しやれい。△冠者「心得ましてござる。申しまする。△大名「何とした。△冠者「亭主申しますのにはいづれもが短冊をなされまするほどに、花につけて、お歌をば詠まつしやれいと申しまする。△大名「ふん、亭主にこれへ出よといへ。△冠者「はつ。△大名「御亭、只今は歌を詠めとおしやる。久しう詠まぬが、何とおぢやろ、一つ詠まうか。△亭主「遊ばしませう。△大名「かうもおりやろか。七重八重九重とこそ思ひしに、とよさき出づる萩の花かな。△亭主「あゝこれはいかう出來さつしやれてござりまする。

△大名「亭主、身は歌よみでおりやるいの、△亭主「あゝ、いかう出來さつしやれてござる。△大名「やい、冠者、亭主が出來たてていかう喜ぶわ。汝は何方へぞ行け。暇を出すほどにゆるりと行て寛ろいで來い。

△冠者「畏つてござりまする。

△亭主「申し殿様。△大名「御亭、何でおぢやるぞ。△亭主「只今短冊に書きまする。もう一度吟じさつしやれませう。△大名「おう、心得ておぢやる。七重八重九重とこそ思ひしに、とよ咲き出づる、いや、冠者奴はどこもとに居るぞちやまでいい。△亭主「申し殿様、御歌に冠者はいりま

すまい、急いで後を詠まつしやれませい。△大名「して、短うおぢやるか。△亭主「なかなか、字がたりませぬ。△大名「したならば、出づるを幾個も書いて置きやれ。△亭主「いやそれではなりませぬ。△大名「はて冠者めが早う戻り居らいで。△亭主「申し殿様、急いで詠まつしやれませい。△大名「こゝな奴は、諸侍に手を掛け居つて、憎い奴の。△亭主「でも、字が足りませぬ。△大名「あゝ思ひ付けたは。△亭主「何と。△大名「ものと。△亭主「何と。△大名「太郎冠者が向脛に、某が鼻の先。△亭主「何でもないこと、疾(こう)ととといかしませ。

(二) 八句連歌

庄右衛門
九郎次郎

○八句連歌―狂言記巻三に出づ。

△庄右衛門「罷り出でたるは、あたりの者でござる。さやうにござれば、九郎次郎と申す者に、ずこし米銭のひかへてござる。度々人を遣りますれども、つひに算用をいたさぬ。今日は自身参り、算用をいたさうと存ずる。やれ扨、憎い奴でござる。用ある折は色々追従などを申し、今は却て悪口などを申しまするげな。いや〳〵、とかう申すうちにこれでござる。某が聲と聞いてござるなら、定めし逢はぬでござろ。作聲をいたし喚び出しませうず。ものも。お案内。△九郎次郎「やら奇特や、表に案内があるおりやる。九郎次郎殿内にござるか。△九郎次郎「南無三寶、彼のしてでござる。留守をつかひませう。九郎次郎、唯今所用ござり、よそへ参られてござる。お這入りなされませい。△庄右衛門「さうおしやるは誰でおりやるぞ。△九郎次郎「いや隣の者でござる。△庄右衛門「其の儀ならば、庄右衛門用あつて参りたれども、お目にかゝらいで戻つた

とおしやつてたもれ。　△九郎次郎「畏つてござる。

△庄右衛門「やれ扨、今のは九郎次郎が聲でござつたが、留守をつかうてござる。彼奴（きやつ）めは、平常（いつも）裏道へ外すと申す。裏道へ向けて參らうず。　△九郎次郎「やれ扨、あぶない事かな。すでにあはうといたした。又わすれば惡い。裏道へ向けて外しませうず。　△庄右衛門「いえ、此處な。　△九郎次郎「はつ。嬉し悲しう、ようござりました。　△庄右衛門「なう九郎次郎、人にさし逢うての言葉は、あまた多うおぢやる。嬉し悲しいとはどうした事ぞ。　△九郎次郎「さればの事でござる。お前お出での由を承つたによつて、逢はいで叶はぬ御方ぢやにと存じ、裏道へ追つかけますると、蹴躓きましたが悲しうござるやら、只今お目にかかつたが嬉しうござるやらで、嬉し悲しいと申してござる。　△庄右衛門「なう九郎次郎、いかう口上が上つたの。それにつき、某が來るは別儀でおりやらぬ。彼の事に參つた。算用をしてたもれ。　△九郎次郎「されば、身どももどうぞ、算用をいたしたいやうに存じたれども、かれこれいたして遲なはつて、迷惑にござろ。やがての中に、きつと算用を仕りませう。　△庄右衛門「なう九郎次郎、そなたのやがて〳〵は、いつぞやからの事でおりやる。逢うたこそは幸なれ。算用をいたそ。　△九郎次郎「どうおつしやれても、今日はなりませぬ。

△庄右衛門「なう九郎次郎、ならぬとおしやつた分では、埒が明くまい。某が方へ向けておぢやれ。　△九郎次郎「私が參つたとても、錢金にはなりますまい。　△庄右衛門「ならうとなるまいとおぢやれ。　△九郎次郎「おう、參れなら、參りませう。　△庄右衛門「おりやれ〳〵。　△九郎次郎「はつ。

△庄右衛門「ほどなうこれでおりやる。　△九郎次郎「扨も〳〵、御普請をなされたによつて、お家も見忘れてござる。この時分をば存じましたらば、手傳に參りませうものをば。　△庄右衛門「おう過分におりやる。手傳人はあまた多うはおぢやつたいの。　△九郎次郎「何が、さやうでご

ざりませう。わ、床をさゝつしやれてござる。　△庄右衛門「されば床を入れておじやる。　△九郎次郎「定めてこれは懐紙がかゝりましたが、屋固(かため)の懐紙でござりませう。　△庄右衛門「なう九郎次郎、わがみの懐紙だては、早いぞや。　△九郎次郎「これは扨、迷惑なことを御意なさるゝ。お前の銀子を貰ひましたのも、悪いことに貰うたでもござらぬ。若い折に、かやうなことにたづさはりましたる故をもち、今に遅なはり、迷惑いたすでござる。　△庄右衛門「なう、そなたは見上げた事をいふ人ぢや。して今もならうか。　△九郎次郎「何が扨、此の時分に参つてござるならば、下の句などはいたして見ませうものを。　△庄右衛門「いよ〳〵の事をいはします人ぢや。して此の手は見知りやつたか。　△九郎次郎「されば、懐紙の位は、大分合點でござるが、お手は見知りませぬ。　△庄右衛門「見知りやらぬは道理、かなん法師が手でおりやる。　△九郎次郎「いえ、此のお手が、かなん法師様の遊ばしましてござるか。これは扨、親御よりも生まれあがらつしやれたことでござる。あの連の字のはねた勢などは、見事でござりまする。　△庄右衛門「ようおりやるかの。　△九郎次郎「なるほど結構なお手でござる。　△庄右衛門「して何も、まそつともあがらうと思やるか。　△九郎次郎「此のお手は、屋根さへなくば、天までもあがらう御手でござる。　△庄右衛門「はれ扨、され事をいふ人ぢや。いざ若い衆を集めて、百句か二百句かいたさう。　△九郎次郎「これは又餘り座様な事でござる。お前と身共と表八句いたしませう。　△庄右衛門「これがようおりやらう。　△九郎次郎「字がさゝば、直しどくにいたしませう。　△庄右衛門「おう、稽古のためぢやほどに、互どくに直そ。　△九郎次郎「ようござりませう。まづ遊ばしませい。　△庄右衛門「いや〳〵、客人發句に亭主脇といふことがある。まづそなたからおしやれ。　△九郎次郎「畏つてござる。かうもござりませうか。　△庄右衛門「何と。　△九郎次郎「花ざかりごめんなれかし松の風といたしましてござる。　△庄右

○懐紙がかゝる―連歌の懐紙に書きたるを掛幅に作りたるなり。

○かなん法師―愛兒をいふ。

衞門「わあ、これは見事でおりやるはいの。△九郎次郎「遠のきましてござるほどに、何とござりまするぞ。△庄右衞門「いや、でけておりやる。さりながら、そつと字がさすはいの。△九郎次郎「さらば直さつしやれませい。△庄右衞門「花まではようおりやる。此の御めんの兎字を取つてすてて、御めんなさじや松の風がようおりやる。△九郎次郎「いえ、字さへ餘りて大事ござらずば、御めんの字は百も二百もいひたいとこころでござる。△庄右衞門「したたらかうもおりやらうか。櫻になせや雨の浮雲といたしておりやる。△九郎次郎「扨も〳〵流石でござる。出けさつしやれてござる。さりながら、慮外ながら、ちつと直したい所がござりまする。△庄右衞門「あらば直しやれ。△九郎次郎「櫻まではようござりまする。なせのせの字を取つて捨てて、さくらになすな雨のうき雲といたしたい句でござる。△庄右衞門「いや〳〵、これはなせのせの字でもつた句かと思ふ。△九郎次郎「したらば、かうもござりませうか。いく度も霞にわびん月の暮。△庄右衞門「かうもおりやらうか。こひせめかくる入相の鐘。△九郎次郎「あゝまをし。△庄右衞門「何とめさつたぞ。△九郎次郎「さればの事でござる。お前の金を負ひましたのは、最早案じ暮すによつて、かねのねの字、あゝいかう耳へ響きました。さりながら、かうもござりませうか。鶏もせめてわかれはのべてなけ。△庄右衞門「人めもらすな戀のせきもり。△九郎次郎「名の立つにつかひなつけそ忍妻。△庄右衞門「お立ちやれ。△九郎次郎「何がお氣に障つてござる。△庄右衞門「そなたのところへ、いつか名の立つほど使をたててをりやるぞ。△九郎次郎「まをし、何と聞かつしやれてござるぞ。お前のは戀の句ではござらぬか。△庄右衞門「なか〳〵。△九郎次郎「戀などと申すは、間の使が洩らしますれば、必ず名の立つものでござる。したによつて、名の立つに使なつけそ忍妻と、いたしてござる。△庄右衞門「扨も〳〵、聞き誤りでおじやつた。出來た句でお

りやる。何がなそなたに褒美が出したいが、はあ何がな。や、これこれ、これをお手前に出そ。△九郎次郎「何でござりまするぞ。△庄右衛門「いや、お手前のこれは借状でおぢやる。△九郎次郎「はて扨、遥なはつたさへ悲しう存ずるに、そなたにとめ置かつしやれてくだされい。やがての中に、きつと御算用を相立てませう。△庄右衛門「して、厭でおりやるか。△九郎次郎「は、いやまをし、厭ではござりませぬ。△庄右衛門「其の儀ならば、只もえ取りやるまいほどに、何をつけておまつしよ。餘り暮へば文をこそやれ。△九郎次郎「辱うござりまする。△庄右衛門「又用ある折はいうておりやれ。△九郎次郎「はつ。謡「やさしの殿の心やな。いつなれぬ花のすがた、いろあらはれて、此のとのの、かりものをゆるさるゝ。たゞひなの殿のこゝろやな。囘「やれさて、これさへおかねば心すつきり。

○宗論―狂言記巻一に出づ。

(三) 宗論

浄土
法華
宿屋

△法華次第「妙法蓮華經、蓮華經の經の字を、きやうせんと人や思ふらん。「罷り出でたるは、都本國寺の坊主でござる。このたび思ひ立ち、甲斐の身延に參詣致し、只今下向道でござる。やれさて、身延と申す所は、聞き及うだよりは、殊勝な所でござる。若い折にかやうに修行を致さねば、老いての物語が無いと申す。先づそろ〳〵上りませう。いや、程は參らねども、草臥れてござるほどに、まづこの所にすこし休らひませうず。

△浄土次第「南無阿彌陀佛の六の字を、むつかしく人や思ふらん。」罷り出でたるは、東山黒谷の愚僧でござる。信濃國善光寺へ參り、只今下向道でござる。まづそろ〳〵上りませう。あれへよささうなる道づれが行かるゝ。呼びかけ道づれに致さうと存ずる。しゝ、申し。△法華「こなたの事でござるか。△浄土「なか〳〵。△法華「何の御用でござるぞ。△浄土「して、こなたはどれからどれへござるぞ。△法華「いや、かう上方へ參る愚僧でござる。△浄土「え、身共も上りまする。卒爾ながら道づれにもならしやるまいか。△法華「いや、身共もつれ欲しいと存ずる所に、合うたり叶うたる事でござる。都までは同道申さう。はれさて嬉しや。さ、ござりませい。△浄土「まづござされ。先でござる程に。△法華「參らうか。△浄土「ござされ〳〵。なう申し、かうして、同道申すからは、乃至は、こなたの方にも、又身共が方にも、五日十日の暇のいる事がござろと、まゝよ、待合せ同道致さうぞ。△法華「なか〳〵、五日十日

○一貫日―俚俗一千日をいふ。

の事はさて置かつしやれい、一貫日でも待合せ、都までは同道申す。△浄土「はれさてよい御坊に出逢うた事かな。してこなたは、都は何處許にござるぞ。△法華「いや、本國寺の愚僧でおぢやる。△浄土「いや、きやつは家例の情强でおぢやる。道すがら爭ひませうず。

△法華「なう〳〵、御坊、して、そなたは又何處許でおぢやるぞ。△浄土「いや、も、何處と申したらば、京邊土の者でおぢやる。△法華「いや、さう仰やれば、心にくうおぢやるほど、名乘らしやれ。△浄土「その儀ならば、名乘りませう。黒谷の坊主でおぢやる。△法華「はれさて、おとましい者とつれだつたことぢや。△浄土「いやはや、もいやがると見えました。

△法華「なう、坊、して、其方は又、此方へはどれへ行かしましたぞ。△浄土「いや。信濃國善光寺へ參りておぢやる。△法華「やあ、參らいで、叶ひそむない坊主ぢや。△浄土「して又、其方は何の方へ行かれましたぞ。

△法華「いや、甲斐の身延へ參詣致した。△浄土「おゝ、參らいで、叶はぬ御

坊ぢや。△法華「なう〳〵、御坊、其方に意見したうおぢやるはいの。浄土「何でおぢやるぞ。△法華「彼所の隅でも、此所でも、黒豆を數へ、くど〳〵と願はうよりも、其方、その數珠を切つて、法華にならせませ。△浄土「いやいや、法華にはなりともなうおぢやる。其方にも意見がしたいは、一部八巻の、二十八品などとて、事むづかしい事を願はうよりも、南無阿彌陀佛とさへ申すればよいに、某が法にならせませ。

△法華「はつたと忘れた事がおぢやる。彼の向に見ゆる在所へ、某は寄らねばならぬ。△浄土「いや先へ行かしませ。△法華「其方のやうなる人にかまはうよりも、某は先へ行たがようおぢやる。はあ嬉しや、逃げ延びてござる。△浄土「なう、御坊、はてさて人に走らしやつた。△法華「え、こゝな、其方とおれと、あみつれた身かいの。△浄土「いや、都までは同道申すとの約束でおぢやる。△法華「いやはや、つれだてならば、つれだたうほどに、某が數珠は辱くも、日蓮上人より傳はりの數珠ぢやほどに、ちつと戴きやれ。△浄土「戴きたか、そち戴け。△法華「いや、是非共戴かせう。こりや〳〵、はゝゝ、嬉しや、思ふまゝに戴かした。△浄土「なう〳〵、某が數珠も、辱くも法然上人より傳はりの數珠、ちつと戴きやれ。これ〳〵、はあ嬉しや、戴かした。まつと戴かせう。いやこりや、見失うて、はてさて、もつけな事をした。

△法華「はあ嬉しや逃げ延びてござる。まづこの所に宿をとりませう。ものも。お案内。△やど「や、表に案内がある。お案内はどなたでござるぞ。△法華「いや、旅の坊主でござる。一夜の宿を貸さつしやれい。△やど「易い事でござる。奥の間へ通らしやれい。△法華「畏つてござる。亭主、田家の相宿厭でござるぞ。△やど「心得ました。△浄土「これは扨、これほどには行き延びはせまいが、日も晩じてござるほどに、宿をとりませう。ものも、お案内。△やど「や、表に案内があるが、案内はど

なた。え、最前のやうな御坊ぢや。△淨土「なう〳〵最前も、某がやうなる坊が、宿を取つてござるか。△やど「なか〳〵、宿を取らしやれてござる。△淨土「某にも貸して下されい。△やど「いや、出家の相宿はなりませぬ。△淨土「いや、さきほどの御坊と某は、弟子兄弟でござるが、言葉論を致し、先へござるほどに、某にも貸して下されい。△やど「心得ました。△淨土「なう〳〵、御坊。△法華「いや、其方は何として來たぞ。なう御亭主、別の間はおぢやらぬか。△淨土「はてさて、ないとおしやるはいの。△法華「其方が構うてのやうはいの。　して其方は、某に後先に附いてまふは、法問ばし爲ても見ようと思やるか。△淨土「いや、まことに、よいところへ氣がついた。夜長にもおぢやる程に、いざ、法問を致さうず。△法華「まづ、したらば、其方からおしやれ。△淨土「まづ、そつちおしやつたがよいは。△法華「ふん、其儀ならば語らうほどに、どちらなりとも、負けた方を、數珠を切らするほどに、さう心やれ。△淨土「まづお語りやれ。△法華「耳の垢を取りて聞かせませ。まづ、五すゐ展轉、隨喜の功德といふ事がある。聞きやつた事があらう。△淨土「まことに、どこでやら聞いておぢやる。△法華「聞かいで何とせう。三國に憚る程の法問ぢや。△淨土「まづ、いかい事をいはずとも、語らせませ。△法華「まづ、五すゐてんでん、ずゐきの功德、又は涙とも、解かせられたる法問な、大地を割り、芋の子を植ゆる、天地の潤を以てずゐきを出す。丈ゆる〳〵とせいじんしたるを刄物で以て薙倒し、芥子で辛々と韲へ、檀方がたで下さるゝ時は、尊うて、有難うて、涙がこぼるゝを以て、五すゐてん〴〵ずゐきの功德、又は、涙とも解かせられたる法問は、有難いことではおぢやらぬか。△淨土「たつた解かせませ。△法華「いや、これまででおぢやる。△淨土「して、それはまことでおぢやるか。それは芥子が辛うて、涙がこぼれたものでおぢやらう。△法華「まづ、小言を言はずとも、其方も解かせませ。△淨土「おゝ、宗論でおぢやるほどに、某も申そ。これへよ

○五十展轉隨喜功德―法華經の一偈を展轉して五十人目に聞きて隨喜したる人すら無量の功德を受くるといふ。法華經隨喜功德品に出づ。

りて聞かせませ。一念彌陀佛、卽滅無量罪と云ふ事がある。お聞きやらうのう。△法華「おゝ、まことに聞きはつつたやうにおぢやる。△淨土「其方の身の上にもある事、又某が身の上にもある事、だんばう方へ齋に參れば、事足らうたる御方へ參れば醍醐の烏頭芽、鞍馬の木の芽漬、ばべん、麩、椎茸、無量のさいを滿ち〳〵て下さるゝ。彼の事足らはぬ御方へ參れば、燒鹽一菜で下さるゝ。彼の無量の菜が滿ち〳〵てあると思うて、心に觀念して下さるゝを以て、一念彌陀佛、卽滅無量罪、又は菜とも、解かせられたる法問な、ありがたうおぢやらぬか。△法華「たつた解かせませ。△淨土「これまでおぢやる。△法華「して、それがまことでおぢやるか。△淨土「なか〳〵、△法華「悉皆たゞ、それはむざいがきといふものでおぢやる。△淨土「いや〳〵、むざいがきではおぢやらぬ。△法華「無いものを有ると思うて食へば、むざいがきではおぢやらぬか。△淨土「いや、そちがやうな者に構はうよりも、非學者論義に

○一念彌陀佛―前出、往生本緣經の文。

○むざいがき―無財餓鬼。

負けじといふことがある。まづ、念佛修致したが好い。△法華「いや、まつと云はしまさいで。いや某もちとまどろみませう。

△淨土「いや、とかう申す間に、御經時になつた。くわ〳〵。なまいだ。

△法華「悉皆彼の坊主は、夜の目が寢られぬと見えた。某も看經を致さう。△淨土「いや、負けじ劣らじと精を出さるゝ。何とがなして、彼の坊を浮かしたいと存じまする。いや、思ひつけた事がござる。一遍上人の踊念佛がござる。これを申しませう。なもだ〳〵。△法華「いや、某も負けは致すまい。蓮華經々々々々。△淨土「南無だ。△法華「蓮華經

△淨土「これは如何な事、取り違へてのけた。實に今思ひ出したり、昔在靈山妙法花、今在西方彌陀、娑婆示現觀世音、三世利益同一體と。この文の聞く時は、法華も彌陀も隔はあらじ、今よりしてはふたりが名をば、今よりしてはふたりが名をば、妙阿彌陀佛とぞ付かうよ。

○念佛修―大藏流本に寢佛者とあり。

○昔在靈山妙法花云々―正しくは名法花。妙阿彌陀も正しくは名阿彌陀。唐の南岳大師の偈文なりといふ。

舞の本

高館（後半）

○高館―出所は義経記八、衣川合戦の事

○鈴木兄弟―紀州熊野の住人。

○ほうなう―奉納か

コトバ、ツレ武蔵坊辨慶君の御前に參り、はや鈴木兄弟こそ討死仕つて候へと申しければ、ツキ判官聞召されて、龜井がことは豫てより思ひ設けたること、無慚や鈴木、紀伊國より遙々と下り、世になき主の方人して、討たれたるこそ無慚なれ。今朝より誦む御經も、早やほうなうの時分になるに、防いでたべや武藏。太夫辨慶承り、今度は某が死番に當つて候と申しもあへず、御出居へつゝと入り、鐵を厚さ五分に鍛はせ、桶皮胴と名付けたるを、刀溜に着けたりけり。黒糸縅の鎧、糸

緋縅の鎧三領を重ね、ざつくと着、ゑびら刀首掻刀三腰までこそ指いたりけれ。長刀こぞりはを打ち違へ、鞍の前輪に締め付け、弓手に熊手おつ取つて、妻手に長刀を打ちかたげ、膝にて馬に乘つたりけり。辨慶が驅け出づれば唯小山の動く如くなり。大勢の中へ割つて入る。膝口高股馬の腹はらり〳〵と引き破れば、將棋倒の如くなり。この勢に恐れ、捨鞭打つて逃ぐる所へ、辨慶駒を駈け寄せ、熊手を指しのべ、甲の天邊に引つ懸け、えいというて引き寄せ、下げ斬りにしてぞ捨てにける。況んやかんわう唐土迄、その名を得たる辨慶が、今を最後の合戦に、面を合はする者はなし。怒れる眼は黒雲の所々の晴間より朝日のうつろふ如くなり。敵を靡けて喚く音、雷電、電光、霹靂、神、獅子象虎の吼うる聲、斯くやと思ひ知られたり。辨慶が二度の駈に、奥方の軍兵は百八十騎討たれたり。今は向ふ敵のあらざれば、物臭い軍かな、思うつる事よとて、小高き所に駒駐け上げ、暫らく陣をぞ取

○かんわう―未詳。

つたりけり。ワキかゝりける所に、信夫の庄司が嫡子、小太郎といつしもの、辨慶が以前の驅足に父討たせ、一矢射ばやと狙ひしが、早爰にて見付け斜ならずに悦び、弓と矢を打ち番つて、かいなぐつてひようと射た。辨慶がのどのどと控へたる、胸板はつしと中り、小兵の矢の悲しさは、矢立に矢をばためずして、ひぞりけるその矢が、内胃へからりと入つて、笛の鎖にひつしと立つ。上太夫へもの〳〵しといふまゝに、矢を掻いかなぐつて見たりければ、鳥の舌にてや射たりけん、矢がらは抜けて根は留まる。さしもに剛なる辨慶も、馬より下にどうと落つる。クドキ太夫あら無念や、西塔の武蔵と て鬼神の様にいはれしが、斯程の細矢に中つて果敢なくならんずる口惜しさよ。コトバ太夫最後に彼奴を斬らずば黄泉の障なるべし。さりながら以前の如く、馬に乗つて追ふならば、怖ぢて左右なく近付くまじい。所詮虚死をせ始め、近付かん所を、斬つて呉ればやと思ひ、側なる胃引つ懸けて虚死

○鳥の舌―鏃の一種

してぞたるみける。ツレ信夫この由見るよりも、さこそ人々の、鬼神の様に宣ひし、武蔵辨慶をこそ、某手に懸け、射落して候へ、首取つて見せ申さんといふ儘に、怒物作（いかりものづくり）三尺八寸、眞甲に指し翳し揉みに揉うでぞ走りける。太夫辨慶鋲の隙よりも、見上げて屹と見て、ツメ天晴器量やよい器量かな。下あつたら若い者を、辨慶が手に懸け失はん事の無惨さよ。下大刀の寸は延びたるや。彼奴に一太刀打たれては、悪しかりなんと思ひて、近々と詰め寄せ、うしおきにかつばと起き、狼藉なる奴めには、手並の程を見せんとて、側なる長刀おつ取つて追ひ詰めさらりと薙いだりけり。高胯斬つて落され、のつけに反す所を細首宙に打ち落し、朱に染うだる薙刀弓手の肩に投げ懸け、駒引き寄せて打乗り、城の内へつゝと入り、駒を彼處に乗り放し大薙刀に縋り、いやたんぢたんぢと漂ひ、あら苦しや兼房よ君は何處に、お座します。コトバワキ兼房武蔵が手を引いて、御前さして參る。

○うしおき―牛起なるべし。

○兼房―増尾十郎権頭。

ッレ判官御覽あつて、あれは武藏か。ワキさん候。ッレ聲を聞けば古の武藏、姿はただ鬼神の如し。美ましやな武藏は、生をも變へず忽に荒人神となつたるぞや。それへ〳〵と仰せければ、ワキ承ると申して、落縁につんと上がり、甲を脫いでとうと置き、甲の袖を片敷いて今を限と見ゆるが、兼房を近付け、最期に若君を一目拜み申さんと云ふ。ワキ兼房は若君を抱き申し武藏が手にぞ渡しける。クドキ　太夫　辨慶若君を抱き申し後れの髮をかき撫で、龜割山の峠にて御產あらせ給ひし時に、辨慶が參り、產湯を引かせ申し、男子は七歲迄物あやかりと承る。若君の御果報あやからせ給はば、伯父賴朝に御あやかり候へ。戒力は御親父判官、弓は爲朝の御弓勢、二相を悟つて惡魔の者の恐れんは、平の秩父にあやからせ給へ。打物召され物の骨切つて、人に怖ぢられたらんは、ものその數にて候はねども、斯う申す武藏めにあやからせ給へ。命の長くわたらせ給はんは三浦の大助が百六になりしに、あやからせ給へと申せし事の夢となり、未だ十にも足らずして、衣川の水の泡と消え果て給はん痛はしやと、はら〳〵と歎きければ、あら痛はしや若君は何のよしみをも、知召されざりしが、辨慶があらけなき、扮裝にも怖ぢ給はず、胸板を下りに流るゝ血を御覽じて、いたいけしたる、御手にて掻き撫でさせ給ひつゝ、葬々と抱き付きわつと叫ばせ給ふにぞ、御前の女房、お末の人、兼房、武藏も、消え入る樣に、泣きにけり。コトバ　ッレ判官御覽あつて、武藏が最期に酒を飮ませよ兼房。ワキ　中承ると申して、長柄の銚子、紅葉の杯を御前に上ぐる。ッレ判官取り上げさせ給ひて、上これは二世迄をさすぞ賜はれ。辨慶餘りの忝さに、三度戴きたう〳〵と受け、ゆう〳〵とはほしけれども、笛が切れたることなれば、血に交りてこの酒が、フシ　同音　胸板を下りにさら〳〵と流れけり。コトバ　ワキ判官御覽あつて、武藏が最期は近づいたるぞ。念佛勸めよ。ッレ承ると申して、兼房念佛を勸めければ、ワキ

○龜割山―羽前國最上郡。義經記七龜割山にて御產の事參照

○平の秩父―畠山重忠。

○三浦大助義明―飜朝の爲に衣笠城を孤守して戰死す。

寄手の兵これを聞き、城の内に念佛の聞うるは、如何樣武藏が腹を切るか。大剛の者の自害の樣、いざ見習つて手本にせん。ッレ尤も然るべしとて我れ先にと亂れ入る。太夫判官御覽あつて、あは敵の近付くは。辨慶腹を切れ。兼房は防矢射よ。御經せんずる間とて御座を立たせ給へば、ッキ辨慶は敵の呼ばはる聲音を力にし、大庭に下り、長刀に縋り又たんぢ〳〵と漂ふ。太夫判官御覽あつて、また打つて出づるか武藏。さん候。イロ判官思ひ續けて斯く許、サシ後の世もまた後の世も、廻り合へそむ紫の下雲の上まで。イロッキ辨慶承り返歌と思しくて斯く許、六道の巷の末に待てよ君後れ先立つ習ありとも。ッメ同音と斯樣に申して堀の舟橋をかぶ〳〵と渡りけり。

奥の軍兵この由を見るよりも、あら恐ろしや又辨慶が懸かるは。爰を引けやと云ふ儘に、我れ先にとぞ逃げにける。衣川颯と追つ越し向のはばたにて漂蕩する兵を十七八騎斬り伏せ、此方の端へ歸らんとしたりしが次第に性根亂るれば、西向につゝ立つて薙刀眼に搖り立てて、光明眞言稱へつゝ生年三十八にして衣川の、立往生を惜しまぬものはなかりけり。

コトバッレ奥方の軍兵この由を見るよりも。あら恐ろしや又辨慶が人をたばかつて打たんとする計か。近う寄つて叶ふまじいぞ。遠矢を射よといふまゝに、指し取り引き詰め散々に射たりけり。武藏に中るその矢は、葦を束ねて楯の板戸を突く風情。固より死したる辨慶にて、その身をちつとも痛まず。太夫かかりける所にぬまたての庄司が申しけるは、如何に方々、到つて心の剛なるものは立ちながら死する習のあると申すに、誰かある弓の弭にてちつと突いて見よ。ッレ實にこれもいはれたりとて、二十騎三十騎、駈け寄せ〳〵立ちけれども、怖ぢて左右なく近付かず。太夫ぬまたての庄司がこれを見て、臆病なる人々かな。其處退けぬまたて突かんとて、駒の手綱

掻い繰つて、かつし〳〵と歩ませ寄つて、弓の弭をおつ取り伸べ、怖づ怖づ、ッメかつぱと突いた。固より死したる辨慶で、枯木を倒す如くに、たんぶとまろびけり。まろびけるその前に、持つたる長刀ひらりとするを見るよりも、ぬまたての庄司は、死したる者と知らずして、又切つて懸かると心得、氣も魂も身に添はず、駒より下に轉び落ち浮きぬ沈みぬ流れて、衣川の堰にせかれて死んだりしを、貴賤上下押し並べて、惡まぬものはなかりけり。

評論

徒然草　二巻、卜部兼好の随筆、二百四十三の箇條を編む。著作年月不詳、正平初年頃か。

神皇正統記　六巻、北畠親房の史論、神代より後村上天皇に至るまでの治亂を論述し皇室の正統を說く。延元四年撰興國四年修正。

世阿彌十六部集　結崎元清の遺著十六部の總稱。猿樂の能の作り方演じ方を述べて子弟を敎へたる書。應永七年より永享八年頃までの著作。

耕雲口傳　一巻、花山院長親の著、歌論の書。應永十五年の著。

正徹物語　二巻、僧正徹の著、歌論の書。上巻を徹書記物語ともいふ。下巻は滑巖茶話とも呼ばる。永享二年の著。

徒然草

○徒然草―卜部兼好の隨筆、兼好は兼顯の子、後宇多院の北面に仕へ、後崩御の後遁世す、（弘安六―正平五）

○あだし野―本書第七段。

○命長ければ恥多し―莊子天地篇「富則多事、壽則多辱」。

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の烟立ちさらでのみ、住みはつるならひならば、いかに物のあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふのゆふべを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらす程だにも、こよなうのどけしや。飽かずをしと思はば、千とせを過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。すみはてぬ世に醜きすがたを待ちえて何かせん。命長ければ恥多し。長くとも四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば、かたちを愧づる心もなく、人に出でまじらはんことを思ひ、夕の

日に子孫を愛し、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、物のあはれも知らずなりゆくなんあさましき。

○家居―本書第一〇段

家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、假の宿とは思へど、興あるものなれ。よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色もひときはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきらゝかならねど、木だち物ふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子透垣のたよりをかしく、うちある調度も、むかし覺えて、やすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。多くのたくみの、心を盡して磨きたて、からのやまとの、珍しくえならぬ調度ども並べおき、前栽の草木まで、心のまゝならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき、又時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見るより思はるゝ。大かたは家居にこそことざまは推しはからるれ。後徳大寺

○夕の日に子孫を愛し―白氏文集巻二、秦中吟「朝露貪名利、夕陽愛子孫」による。愛は愛の誤り。

○後徳大寺の大臣―後徳大寺左大臣實定

○綾小路宮―亀山天皇十三の皇子。性恵法親王。

の大臣の、寢殿に鳶居させじとて、縄を張られたりけるを西行が見て「鳶の居たらんは、なにかは苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそ」とて、その後は參らざりけるとぞ聞きはべるに、綾小路の宮のおはしします小坂殿の棟に、いつぞや縄をひかれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに「まことや、烏の群れ居て、池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給ひてなん」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覺えしか。後徳大寺にも、いかなる故か侍りけん。

○萬の事―本書第二一段。

○

萬づの事は月見るにこそ慰むものなれ。或人の「月ばかり面白きものはあらじ」といひしに、又一人「露こそあはれなれ」と爭ひしこそをかしけれ。折に觸れば何かはあはれならざらん。月花はさらなり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて淸く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去る。

○沅湘日夜云々―唐の戴叔倫が湘南即事「廬橘花開楓葉衰出レ門何處望二京師一沅湘日夜東流去不下爲二愁人一住少時上。

愁人の爲にとゞまること少時もせず」といひける詩を見侍りしこそあはれなりしか。稽康も「山澤に遊びて魚鳥を見れば心樂しぶ」といへり。人遠く水草清き處にさまよひありきたるばかり、心慰むことはあらじ。

○

靜に思へば、萬づに過ぎにし方の戀しさのみぞせん方なき。人靜まりて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、殘し置かじと思ふ反古などやりすつる中に、亡き人の手習ひ、繪かきすさびたる見出でたるこそ、唯そのをりの心地すれ。このごろある人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手馴れし具足なども、心もなくて變らず久しき、いとかなし。

○

老きたりて始めて道を行せんと待つことなかれ。古き墳、多くはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽ちにこの世を去らんとする時にこそ、はじめて過ぎぬるかたのあやまれることは知らるなれ。あやまりといふは、他の事にあらず。速にすべき事をゆるくし、ゆるくすべき事を急ぎて、過ぎにしことのくやしきなり。その時悔ゆともかひあらんや。人はたゞ、無常の身にせまりぬる事を、心にひしとかけて、つかのまも忘るまじきなり。さらば、などかこの世の濁もうすく、佛道を勤むる心もまめやかならざらん。昔ありける聖は、人の來りて、自他の要事をいふ時、答へていはく、今火急の事ありて、既に朝夕にせまれりとて、耳をふたぎ念佛して遂に往生を遂げたりと、禪林の十因に侍り。必戒といひけるひじりは、あまりにこの世のかりそめなることを思ひて、しづかについ居けることだになく、常はうづくまりてのみぞありける。

○

○稽康―竹林の七賢の一人。

○靜に思へば―本書第二九段

○老きたりて―本書第四九段。

○禪林の十因―禪林寺の永觀律師の著。「往生十因」を指す。

○應長の頃―本書第五〇段。○應長―花園天皇の代の年號。

應長のころ、伊勢の國より、女の鬼になりたるをゐてのぼりたりといふことありて、そのころ二十日ばかり、日ごとに、京白川の人、鬼見にとて出でまどふ。「昨日は西園寺に參りたりし。今日は院へまゐるべし。唯今はそこ〳〵に」などいひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、虛言といふ人もなし。上下たゞ鬼の事のみいひやまず。そのころ、東山より安居院邊へまかり侍りしに、四條よりかみざまの人、みな北をさしてはしる。一條室町に鬼ありとのゝしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更に通り得べうもあらず立ちこみたり。はやく、跡なき事にはあらざめりとて、人をやりて見するに、大かた逢へるものなし。くるゝまで、かく立ちさわぎて、はては鬪諍起りてあさましき事どもありけり。その頃、おしなべて、二日三日、人のわづらふこと侍りしをぞ「かの鬼の虛言は、このしるしを示すなりけり」といふ人も侍りし。

○道心あらば―本書第五八段。

道心あらば、住む所にしも依らじ。家にあり、人に交るとも、後世を願はんに、かたかるべきかは」といふは、更に後世知らぬ人なり。實には、この世をはかなみ、必ず生死を出でんと思はんに、何の興ありてか、朝夕、君に仕へ、家を願るいとなみのいさましからん。心は緣に引かれて移るものなれば、靜ならでは道は行じがたし。そのうつはものゝ、むかしの人に及ばず、山林に入りても、飢を助け嵐を防ぐよすがなくてはあられぬわざなれば、自ら世を貪るに似たる事も、便にふれば、などかなからん。さればとて「背けるかひなし、さばかりならば、なじかは捨てし」などいはんは、無下の事なり。さすがに一たび道に入りて、世を厭はん人、たとひ望ありとも、勢ある人の貪慾多きに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけ、藜のあつもの、いくばくか人のつひえをなさん。もとむる所は易く、その心はやく足りぬべし。

かたちにはづる所もあれば、さはいへど、惡には疎く、善には近づく事のみぞ多き。人と生れたらんしるしには、いかにもして、世を遁れん事こそあらまほしけれ。偏に貪ることをつとめて、菩提に赴かざらんは、萬づの畜類にかはる所あるまじくや。

○

高名の木登りといひし男、人をおきてて高き木に登せて梢を切らせしに、いと危く見えし程はいふこともなくて、下るゝときに軒だけばかりになりて、「過すな、心して下りよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び下るとも下りなん。いかにかくいふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候。目くるめき、枝危き程は、おのれが恐れ侍れば申さず。過は安き處になりて必ず仕る事に候」といふ。あやしき下臈なれども、聖人の戒にかなへり。鞠も難き所を蹴出して後、易く思へば、必ず落つと侍るやらん。

○高名の木のぼり―本書第一〇九段。

○聖人の戒―易繫辭に「君子安而不レ忘レ危治而不レ忘レ亂」

○

明日は遠國へ赴くべしと聞かん人に、心しづかになすべからんわざをば、人いひかけてんや。俄の大事をも營み、切に歎く事もある人は、他の事をきき入れず、人の愁喜をもとはず。問はずとて、などやと恨むる人もなし。されば、年もやう〳〵たけ、病にもまつはれ、況や世をも遁れたらん人、又これに同じかるべし。人間の儀式、いづれの事か去りがたからぬ。世俗のもだしがたきに隨ひて、これをかならずとせば、願も多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雜事の小節にさへられて、空しく暮れなん。日暮れ途遠し、吾が生已に蹉跎たり、諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮義をも思はじ。この心を得ざらん人は、物狂ひともいへ、現なし情なしとも思へ、譏るともくるしじ、謗むるともきこえじ。

○

○明日は遠國へ―本書第一一二段

○日暮れ途遠し―白居易傳。「日暮而途遠、吾生已蹉跎」

筆を取れば物書かれ樂器を取れば音を立てんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽をとれば擲打たんことを思ふ。心は必ず事に觸れて來る。かりにも不善の戯をなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。率爾にして多年の非を改むることもあり。かりに今此の文をひろげざらましかば此の事を知らんや。これ卽ち觸るゝ所の益なり。

心更に起らずとも、佛前にありて珠數をとり經をとらば、怠るうちにも善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理もとより二ならず。外相若し背かざれば、内證必ず熟す。强ひて不信といふべからず。仰ぎてこれを尊むべし。

○丹波に出雲―本書第一五七段。

○筆を取れば―本書第二三六段。

丹波に出雲といふ所あり。大社を遷してめでたく造れり。志太の某とかや、しる所なれば、秋のころ、聖海上人、その外も人あまた誘ひて、「いざ給へ、出雲をがみに、かいもちひめさせん」とて具しもていきたるに、おのおの拜みて、ゆゝしく信おこしたり。御前なる獅子高麗犬、背きて後ざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや、この獅子のたちやう、いとめづらし。深きゆゑあらん」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝の事は御覽じ咎めずや。無下なり」といへば、おの〳〵あやしみて、「まことに他に異なりけり。都のつとに語らん」などいふに上人猶ゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子のたてられやう、定めてならひあることに侍らん。承らばや」といはれければ、「その事に候。さがなき童どもの仕りける、奇怪に候ことなり」とて、さし寄りて居ゑ直していにければ、上人の感涙いたづらになりにけり。

八つになりし年、父に問うていはく、「佛はいかなるものにか侯らん」といふ。父がいはく、「佛には人のなりたるなり」と。また問ふ、「人は何として佛になり侯やらん」と。父また、「佛の敎によりてなるなり」と答ふ。また問ふ、「敎へ侯ひける佛をば、何が敎へ侯ひける」と。また答ふ、「それも又さきの佛の敎によりてなり給ふなり」と。また問ふ、「その敎へはじめ侯ひける第一の佛はいかなる佛にか侯ひける」といふ時、父「空よりやふりけん、土よりやわきけん」といひて笑ふ。「問ひつめられて、え答へずなりはべりつ」と、諸人に語りて興じき。

○八つになりし年―本書第二四三段。

○神皇正統記―北畠親房の著、後村上天皇の延元四年に成る。親房は源氏、中院入道といふ（永仁元―正平九）

神皇正統記

（一）王者の軍

さてもその世の亂を思ふに、誠に末の世には迷ふ心もありぬべく、又下の上を凌ぐはしともなりぬべし。そのいはれをよく辨へらるべきことに侍り。賴朝、勳功は昔よりたぐひなき程なれど、偏に天下を掌にせしかば、君としては安からず思しめしけるも理なり。況や、その跡絶えて、後室の尼公、陪臣の義時が世になりぬれば、彼の跡を削りて、御心のまゝにせらるべしといふも、一往の謂（いはれ）なきにあらず。然れども、白河鳥羽の御代の頃より、政道の古き姿やう〳〵衰へ、後白河の御時兵革起りて、姦臣世をみだり、天下の民、ほと〳〵塗炭に落ちにき。

○後室の尼公―賴朝の室、平政子。

頼朝一臂を振ひてその亂を平げたり。王室は古きに復るまではなかりしかど、九重の塵も收まり、萬民の肩も休まりぬ。上下堵を安くし、東より西より、その德に伏せしかば、實朝なくなりても、背く者ありとは聞えざりき。これに勝る程の德政なくして、いかでたやすく覆さるべき。たとひ又失はれぬべくとも、民安かるまじくば、上天よも與し給はじ。

次に王者の軍といふは、科ある を討じ、疵なきをば滅さず。頼朝高官にのぼり、守護の職を給ひし、これ皆法皇の勅裁なり。私に盜めりとは定めがたし。後室その跡を計ひ、義時久しく彼が權を執りて人望に背かざりしかば、下には未だ疵ありといふべからず。一往の謂ばかりにて追討せられむは、上の御咎とや申すべき。謀叛起したる朝敵の利を得たるには比量せられ難し。かゝれば、時の至らず、天の許さぬことは疑なし。

但し下の上を剋するは、極めたる非道なり。終には、などか皇化にまつろはざるべき。まづ、誠の德政を行はれ、朝威をたて、彼を剋するばかりの道ありて、その上の事とぞ覺ゆる。且は、世の治亂の姿をも能く鑑み知らせ給ひて、私の御心なくば、干戈を動さるゝか、弓矢ををさめらるゝか、天の命に任せ、人の望に從はせ給ふべかりしことにや。終にしては、繼體の道も正路にかへり、御子孫の世に一統の聖運を開かれぬれば、御本意の未だ達せぬにはあらざれど、一旦も沈ませ給ひしこそ口惜しけれ。（卷五）

○繼體の道も云々―後堀河四條の二代をへて、終に土御門の御子、後嵯峨御位に卽き給ふ。

（二）北條泰時

大方泰時、心正しく政すなほにして、人をはぐくみ、物におごらず、公家の御事を重くし、本所の煩をとどめしかば、風の前に塵なくして、天

の下則ち靜まりき。かくて年代を重ねしこと、ひとへに泰時が力とぞ申し傳ふめる。陪臣として久しく權を執ることは和漢兩朝に先例なし。その生たりし賴朝すら、二世をば過ぎず。義時いかなる果報にか、圖らざる家業を始めて、兵馬の權を執れりき。ためし稀なることにや。されど、殊なる才德は聞えず。又、大名の下に矜る心やありけむ、中二とせばかりありて、身まかりしかど、彼の泰時相續して、德政を先として、法式を固くし、己が分を計るのみならず、親族、竝にあらゆる武士までも戒めて、高官高位を望む者なかりき。その政、次第のまゝに衰へ、つひに滅びぬるは天命の終る姿なり。七代まで保てるこそ彼が餘薫なれば恨むる所なしといひつべし。

およそ、保元、平治よりこの方の濫がはしきに、賴朝といふ人もなく、泰時といふ者もなからましかば。日本國の人民、いかがなりなまし。この謂をよく知らぬ人は、故もなく皇威の衰へ、武備の勝ちにけると思へるは誤なり。天日嗣は御讓にまかせ正統に反らせ給ふにとりて、用意あるべきことの侍るなるなり。神は人を安くするを本誓とす。天下の萬民は、皆神物なり。君は尊くましませど、一人を樂ましめ、萬民を苦しむることは、天も許さず、神もさいはひせぬ謂なれば、政の可否に隨ひて、御運の通塞あるべしとぞ覺ゆる。まして人臣としては、君を尊び民を憐み天にせぐくまり地にぬき足し、日月の照すを仰ぎても、心のきたなくして光にあたらざらむことを怖ぢ、雨露の施すを見ても、身の正しからずして惠に洩れむことを顧みるべし。朝夕に長田、狹田の稻の種を食ふも皇恩なり。晝夜、生井、栗井の水の流を呑むも神德なり。これを思ひも入れず、あるにまかせて欲を恣にし、私を先として公を忘るる心あるならば、世に久しき理あらじ。況や國柄を執る仁にあたり、兵權を預る人として、正路を踏まざらむにおきては、いかでかその運を全くすべき。泰時が昔を思ふには、よく誠あ

る所ありけむかし。子孫はさほどの心あらじなれど、固くしける法のままに行ひければ、及ばずながら世をも重ねしにこそ。

異朝の事は亂逆にして紀なきためし多ければ、例とするにたらず。我が國は神明の誓いちじるしくして、上下の分定まれり。しかも善惡の報あきらかに、因果の理空しからず、且は遠からぬ事どもなれば、近代の得失を見て、將來の鑒誡とせらるべきなり。（同）

（三）登用の道

昔、人をえらび用ひられし日は、「先づ德行をつくす。德行同じければ才用あるを用ひ、才用ひとしければ勞効あるをとる。」又「德義・清愼・公平恪勤の四善をとる」とも見えたり。又、格條には、「朝に厥の養たれども夕に公卿に至る」といふことのあるも、德行・才用により

○先づ德行云々―大寶の選敍令に出づる

○四善をとる―大寶の考課令に出づ

て不次に用ひらるべき必なり。寬弘よりあなたには、まことに才賢ければ、種姓にかゝはらず將相に至る人もあり。寬弘以來は譜第をさきとして、その中に、才もあり德もありて職に適ひぬべき人をぞ選ばれける。世の末に濫りがはしきことを誡められしにやありけむ。「七箇國の受領をへて、合格して公文といふこと勘へぬれば參議に任ず」と申しならはしたるを、白河の御時、修理正顯季といひし人、院の御乳母の夫にて、時のきら、並ぶ人なかりしが、この勞をつのりて參議を申しけるに、院の仰に、「それも物書きての上のこと」とありければ、理にふしてやみぬ。この人は歌道なども譽ありしかば、物書かぬ程のことやはあるべき。又、參議になるまじき程の人にもあらじなれど、和漢の才學の足らぬにぞありけむ。白河の御代までは、よく官を重くし給ひけりと聞えたり。あまり譜第をのみとられても、賢才の出でこぬはしなければ、上古に及びがたきことを恨むるやからも

○寬弘―一條天皇の御代の年號。

○七箇國云々―「國司加階事云々七箇國可任三木」（北山抄）是常例也」

○物書きて―考試に詩歌對策等を書きて合格したる上云々。

あれど、昔のまゝにてはいよ〳〵亂れぬべければ、譜第を重くせられけるも理なり。但し才も賢く德もあらはにして、登用せられむに、人の誇あるまじき程の器ならば、今とても必ず非重代によるまじきことぞ覺え侍る。

その道にはあらで一旦の勳功などいふばかりにて、武家代々の陪臣をあげて高官を授けられむことは、朝議の濫りなるのみならず、身の爲も能く愼しむべきことぞ覺え侍る。もろこしにも、漢の高祖はすゝろに功臣を大きに封じ、公相の位をも授けしかばはたして驕りぬ。おごりぬれば滅す。よりて後には功臣殘なくなりにけり。後漢の光武はこの事に懲りて、功臣に封爵を與へけるも、その首たり、し鄧禹すら、封せらるゝ所四縣に過ぎず。官を任ずるには、文吏を求めえらびて功臣をさしおく。これによりて二十八將の家久しく傳はり、昔の功も空しからず、朝には名士多く用ひられて曠官の謗なかりき。彼の二十八將の中にも、鄧禹と賈復とは、そのえらびにあづかりて官にありき。漢朝の昔だに文武の才を備ふること、いとあり難かりけるにこそ。（卷六）

○二十八將―鄧禹・馬成・吳漢・王梁・賈復・陳俊・耿弇・杜茂・寇恂・傅俊・岑彭・堅鐔・馮異・王霸・朱祐・任光・祭遵・李忠・景丹・萬脩・蓋延・邳彤・銚期・劉植・耿純・臧宮・馬武・劉隆。

（四）神皇正統の理

○同十二月―延元々年（建武三年）

同十二月に、忍びて都を出でましく〳〵て、河内の國に正成と言ひしが一族等を召具して、吉野に入らせ給ふ。もとの如く、在位の儀にてぞましく〳〵ける。内侍所も移らせ給ひぬ、神璽も御身に隨へ給ひけり。まことに奇特の事にこそ侍りしか。

吉野の御幸に先だちて、義兵を興す輩も侍りき。臨幸の後には、國國にも御志ある類數多聞えしかど、次の年も暮れぬ。

○顯家卿—親房の子
○親王—義良親王、初名憲良、後醍醐天皇第八皇子、後村上天皇。太平記には第七の皇子とあり。

○苔の下—内侍（小式部）なくなりて次の年七月に、例遣る文に名の書かれたるを。「諸共に苔の下には朽ちずして埋もれぬ名を見るぞ悲しき。」（和泉式部、家集三、金葉一〇、雜下）

○義貞—同年閏七月藤島に戰死。

○顯信—顯家の弟。

又の年戊寅の春二月、鎭守府の大將軍顯家卿、また親王を先立て申し、重ねてうち上る。海道の國々悉く平ぎぬ。伊勢・伊賀を經て、大和に入り、奈良の京になむ著きにける。それより所々の合戰數多度、互に勝負侍りしに、同五月、和泉の國石津といふ所にての戰に、時や到らざりけむ、忠孝の道こゝに極まり侍りにき。苔の下にも埋もれぬものとては、たゞ徒らに名をのみぞ留めし。心憂き世にも侍るかな。

官軍、猶心を勵まして、男山に陣を取りて暫らく合戰ありしかど、朝敵忍びて社壇を燒拂ひしより、事成らずして引退く。北國にありし義貞も、度々召されしかど、上りあへず、させる事なくて、空しくさへなりぬと聞えしかば、言ふばかりなし。

さてしも止むべきならずとて、陸奥の御子また東へ向はしめ給ふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に叙し、陸奥の介、鎭守府將軍を兼ねて遣はさる。東國の官軍、悉く、彼の節度に從ふべき由を仰せらる。親王は、儲の君に立たせ給ふべき旨、申し聞かせ給ふ。「道の程も忝かるべし。國にてはあらはさせ給へ」となん申されし。異母の御兄も數多まし〳〵き。同母の御兄も、前東宮恒良親王・成良親王まし〳〵しに、かく定まり給ひぬるも、天命なれば忝し。

○同母—新侍賢門院藤原（阿野）廉子。

○恒良親王—後醍醐天皇第六皇子、建武元年正月立太子、延元二年七月足利直義の爲に毒害せられ給ふ。御年十五、世に八歳宮と申す。

○成良親王—後醍醐天皇第七皇子、光嚴院の春宮たりしが廢せられて恒良親王と同時に毒害せられ給ふ。

七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して、御船のよそひし、九月のはじめ、纜を解かれしに、十日餘の事にや、上總の地近くより、空の景色おどろおどろしく、海上荒くなりしかば、また伊豆の崎といふ方に漂はれ侍りしに、いとゞ波風夥しくなりて、數多の船、行方知らず侍りけるに、御子の御船は、障なく伊勢の海に著かせ給ふ。顯信朝臣は、もとより御船に候ひけり。同じ風のまぎれに、東國を指して、常陸の國なる内の海に著きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて、東西に吹き分けらる。末の世には珍らかなるためしにぞ侍るべき。儲の君に定まらせ給ひて、ためしなき鄙

の御住居も如何と覺えしに、皇大神のとゞめ申させ給ひけるなるべし。後に吉野へ入らせまし〳〵て、御目の前にて、天位を繼がせ給ひしかば、いとゞ思ひ合せられて尊くも侍るかな。また、常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相謀らひて、義兵こはくなりぬ。奥州・野州の守も、次の年の春、重ねて下向して、各々國につき侍りにき。

さても舊都には、戊寅の年の冬、改元して、暦應とぞ言ひける。吉野の宮には、もとの延元の號なれば、國々も思ひ〳〵の號なり。もろこしには、かゝるためし多けれど、この國には無し。されど、四年にもなりぬるにや。大日本島根は、もとよりの皇都也。内侍所・神璽も、吉野におはしませば、何處か都にあらざるべき。

さても八月の十日あまり六日にや、秋霧に冒されさせ給ひて、かくれまし〳〵ぬとぞ聞えし。ぬるが中なる夢の世は、今に始めぬ習ひとは知りながら、かず〳〵目の前なる心ちして、老の涙もかきあへね

○奥州野州の守―陸奥の守、北畠顯信等。

○八月―延元四年。

○ぬるが中なる―「ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とは見ず。」（壬生忠岑、古今一六、哀傷）

ば、筆の跡さへ滯りぬ。昔仲尼は、獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて止りたく侍れど、神皇正統のよこしまなるまじき理を申し述べて、素意の末をもあらはさまほしくて、強ひて記しつけ侍るなり。かねて時をも悟らしめ給ひけるにや、前の夜より、親王をば左大臣の第へ遷し奉られて、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば、仰せの儘にて、後醍醐の天皇と申す。天下を治め給ふ事二十一年、五十二歳おましましき。

昔、仲哀天皇、熊襲を攻めさせ給ひし時、行宮にて神さりまし〳〵き。されど、神功皇后　なく三韓を平げ、諸皇子の亂を靜められて、胎中天皇の御代に定まりき。この君、聖運まし〳〵しかば、百七十餘年中絶えにし一統の天下をしらせ給ひて、御目の前にて、日嗣を定めさせ給ひぬ。功もなく德もなき盜人、世におこりて、四年あまりが程、宸襟を惱まし、御世を過ぐさせ給ひぬれば、御怨念の末、空しくありなむや。

○獲麟―孔子が哀公十四年春、西狩獲麟といふ句にて、春秋の筆を止めし故事。

○左大臣―藤原經忠

○胎中天皇―應神天皇。

今の帝、また天照大神よりこの方の正統を受けまし〳〵ぬれば、この御光に爭ひ奉るものやはあるべき。なか〳〵、かくて鎭まるべき時の運とぞ覺え侍る。（同）

世阿彌十六部集

○世阿彌―結崎元清、觀阿彌清夫の子、此の門流を觀世といふ。（正平一八―嘉吉三）

（一）奥儀

ことごとく物數を究めずとも、假令、十分に七八分究めたらん上手のその中に、殊に得たる風體を、我が門體の形木にし究めたらむが、しかも工夫あらば、これ又、天下の名望を得つべし。さりながらげには十分に足らぬ所あらば、都鄙上下に於て、見所の褒貶の沙汰あるべし。凡そ能の名望を得る事、品々多し。上手は目利かずの心にあひ叶ふ事難し。下手は目利きの眼に合ふ事なし。下手にて目利きの眼に叶はぬは、不審あるべからず。上手の目利かずの心に合はぬ事、是は目利かずの眼の及ばぬ所なれども、得たる上手にて工夫あらん爲手

ならば、又目利かずの眼にも、面白しと見るやうに能をすべし。此の工夫と達者とを究めたらん爲手をば、花を究めたるとや申すべき。されば、此の位に到りたらん爲手は、如何に年よりたるとも、若き花に劣る事あるべからず。されば、この位を得たらん上手こそ、天下にも許され、又遠國田舍の人までも、遍く面白しとは見るべけれ。

（花傳書、風姿花傳第五）

○花傳書―十六部の一、應永七年乃至九年の筆錄。

（二）用心

一、能に萬づ用心を持つべき事。假令、怒れる風體にせん時は、柔かなる心を忘るべからず。これ、如何に怒るとも、荒かるまじき手だてなり。怒れるに、柔かなる心を持つこと、珍しきことわりなり。又、幽玄の物眞似に、強きことわりを忘るべからず。是れ一切舞・働・物眞似、あらゆる事に住せぬことわりなり。又、身を使ふうちにも心根あるべし。身を強く動かす時は、足蹈を盜むべし。足を強く蹈む時は、身をば靜に持つべし。これは筆に見えがたし。相對しての口傳なり。

（花傳書、花傳第七別紙口傳）

○別紙口傳―十六部の一、應永二十五年の筆錄。

（三）淺深之事

能に心に懸けて思ふべき事あり。細かになければ、面白からず。さて細かなる心を心がくれば、能姿小さく見ゆる相あり。又大やうにせんと心がくれば、見所少くて、のさになる相あり。この分目すべてすべて大事也。先づ細かなるべき所をば、いかにも細やけて、大やうなるべき所をば、大やうにすべきかなり。この分目、殊に〳〵能を知らでは叶ふべからず。よく〳〵師に問ひて、之を明らむべし。然

○すべきかなり―本のまゝ。

れども、大方心得べきやうあり。二曲、振、風情、萬づにつけて、心を細かにして、身を大やうにすべし。能く〳〵心にかけて、定心に持つべし。總じて能は、大なる形木より入りたる能は、細かなる方へも行くべし。小さき形木より育ちたる能は、大なる方へは左右なく行くまじきなり。大の中には小あり、小の中には大なし。よく〳〵工夫すべし。大小にわたるは廣き能なるべし。大寒氷解、小寒云々。（覺習條々）

○二曲―舞と歌。

○覺習條々―十六部の一、筆錄年次不詳。

○大師―弘法大師。

（四）皮肉骨の事

此の藝態に皮、肉、骨あり、この三そろふ事なし。しかれば手跡などにも、大師の御手ならでは、この三そろひたるはなしと申し傳へたり。抑、この藝態に皮肉骨の在所を指さば、まづ下地の生得ありて、をのづから上手に出生したる瑞力の見所を骨とや申すべき。舞歌の習力の滿風、見にあらはるゝ所、肉とや申すべき。このしな〳〵を長じて、やすくうつくしくきはまる風姿を、皮とや申すべき。又、見、聞、心の三にとらば、見は皮、聞は肉、心は骨なるべきやらむ。又音曲ばかりにもこの三あるべし。舞のみにも又あるべし。（音聲は皮、曲は肉、息は骨、姿は皮、手は肉、心は骨）よく〳〵心え分くべし。こゝに當世の藝人の事を見るに、此の三を持したる人なきのみならず、かやうの事のあるとだにしれる者なし。是は亡父のひそかに申傳へしによりて身にもわきまへたり。いまほどの藝人を見及ぶ分は、たゞ皮のみすこしする也。それもまことの皮にはあらず。又似する分も皮のみ也。しかれば無主のしてなりとも、又するべき事あり。下地のえたらんは骨、舞歌の達風は肉、人たいの幽玄は皮にてありとも、三をもちたるばかりなるべし。三そろひたる爲手とは、なほも申しがたし。そろふと申さん位は、たとへば如此の瑞

風をことぐくきはめて、すでに至上にて、やすく、無風の位になりて、
卽座の風體はたゞおもしろきのみにて、見所も妙見に亡して、さて後
心に案見するとき、なにと見るも、弱き所のなきは、骨風の藝劫の感、な
にと見るも、事の盡きぬは、肉風の藝劫の感、何と見るも幽玄なるは、皮
風の藝劫の感にて、離見の見にあらはるゝ所をおもひあはせて、皮肉
骨そろひたる爲手なりけりとや申すべき。（至花道書）

○至花道書―十六部の一、應永二十七年の筆錄。

○耕雲―花山院長親入道明魏、耕雲と號す。（―永享元）

耕雲口傳

○

所詮天つちはじまりてより此の道起れりといふは、古來の先達の言葉なれども、さして信をとることもなくて過ぎにしを、山林修行の後、無事閑寂の中に、自然によく心得たり。萬物の性は不生不滅なり。生滅にあづからざる性、萬理を具足せり。此の一性は、天地に先だちて、あらずといふ時もなく所もなし。天地におくれてもまた然なり。是萬物の根源なり。和歌の理また則ち是にあり。天つち分れてありといふは、猶皮相の上の言葉なり。されど天地相わかれ、陰陽互にきざして、日月星辰は天に付き、山川草木は地に付くなり。日出でて起き、日入りてふす。天地のうちにありとしあるわざ、何事か此の歌

の道をはなれたるや。吟咏して花をあはれび、露をかなしむは、既に言葉におちたれば、和歌の第二義門なり。歌の眞體にあらざるべし。歌をば日本の陀羅尼なりと、古人是をいへり。又神明、佛陀、菩薩、聖衆、これによりて志をのべたまへるは、唯此の深理あるによれるにこそあらめ。

抑も三十一字につらぬるに付きて、堪能有り不堪あり。堪能といふは、生れ付にいひ出すことの理正しく、言の葉幽微にやさしきなり。不堪といふは、心きかず詞つたなきなり。しかはあれど、堪能を恃みてさのみ稽古の功を積むことなければ、つひにさせる秀逸も出で來ず、不堪を恥ぢて是をたしなめば、日比の拙き所直りもて行きて、堪能のしわざと異ならざるなり。或は生れながらにして知り、或は學びて知る。其の功をなすに至りては一つなりと、孟子書傳に說けるも此の理なり。道人の中に、利根の人は一聞千悟す。鈍根の人も志を

○日本の陀羅尼なり—沙石集に「言少くして心を含めり。惣持の義あるべし。惣持といふは、即ち陀羅尼なり」とあり。

○生れながらにして知り—中庸第二十章、「或生而知之或學而知之(中略)及其成功一也」の文による。

はこべば、つひに圓明の實性にかなふが如し。たゞ生れ付に心たくみに詞やさしき人の、稽古の功を積みたるが、ありがたき達者といはるゝなり。其の人古今多し。

たゞ寢食をわすれ、萬事を忘却して、朝夕の風の聲に心をすまし、雲の色に眺めをこらして、塵の間のあだ事に心をみだらず、一大事を心にかけたる人の、いつも胸中に大疑團のあるが如くにて明し暮せば、自然に歌に心うかみたる時も、又歌の席にのぞみて題にとりむかひたる時も、その折ふし見ゆる空のけしき、雲のたゝずまひ、かの時に聞きし風の聲、雨の音などの、ふと心にうかびて、ふしぎなる風情、あたらしきこゝろねなどの、よみいださるゝなり。

正徹物語

○正徹―禪僧、東福寺の書記たりしより徹書記と呼ばる。清巖と號す（應永二八―長祿三）

定家―爲家―
- （二條）爲氏―爲世
- （京極）爲教―爲兼
- （冷泉）爲相

○魔醯修羅―英醯伊濕伐羅、色界の頂上に在る天神「摩醯首羅天秦言ニ大自在ト。八臂三眼騎ニ白牛ニ。」（智度論二）

一、抑歌道に於て定家を難せん輩は、冥加もあるべからず。罰を蒙るべき事なり。其の末流二條冷泉兩流に分れ、爲兼一流とて三の流あり、魔醯修羅の三目の如くなり。互に抑揚褒貶あれば、何れをさみし、何れをもてなすべき事にもあらざるか。是等の一流は、皆僅に一體を學び得て、各々爭ひあへり。全くその流には、目をかくべからず。不叶迄も、定家の風骨を美み學ぶべしと存じ侍るなり。かれは向上一路と言ふやうに、凡慮の及ぶ所にあらずとて、其の末葉の風體を目にかくべきと申す輩は侍れども、予が存じ侍るは、「上たる道を學びて、中たる道を得」と申し侍れば、及ばぬまでも、無上の所に目をかけてこそ、不叶ば中たる道をも得べけれと存ずるなり。佛法修行も、佛果にこそ目をかけて修行すべけれ。よわ〳〵しく三乘道にて、さて果てんと志して、修行すべき事にはあらず。但、其の風體を學ぶとて、てにはことばを似せ侍るは、傍痛き事なり。いかにも、其の風骨、心遣ひを學ぶべきなり。

○

一、幽玄體は、まさしくその位にのり居て、納得すべき事にや。人の多くは幽玄なる事よと言ふを聞けば、たゞ餘情の體にて、さらに幽玄にはあらず。或は物哀體などを心得て、貫之も物つよきをば詠み侍りしが、幽玄拔群の體をば詠まずと、定家書き給へり。物哀體をば、歌人のたしなみ詠むなり。

○

一、歌詠まぬ時、抄物を見渡して、晴の歌を詠まんとては、抄物をば、さは

○貫之も―昔、貫之歌心たくみにたけ及び難く言葉強く姿面白きさまを好みて餘情妖艷の體をよまず。（近代秀歌）

さはと取置きて、何も無くして案じたるがよきなり。古抄物を見てちとづつ書付け置きて詠みたる歌は、何としても、同類もあり、よき歌無き也。さやうに詠みつくれば、癖になりて、晴の歌詠まれず。昔、女などは、或は臥し、或は燈火を幽かに挑げて、心細くして案じたる人もあり。西行が、一期行脚に出でて歌を詠みし故、行道して案じ、或は北面の戸を細めに開けて月のかげを見、定家は、南面を取拂ひて眞中に居て、南を遙に見晴して、衣紋正しく著て案じ給ひき。これは、内裏仙洞等の、晴の御會にて詠むやうに、違はずしてよき也。俊成はいつも煤けたる淨衣の上ばかりうちかけて、桐火桶にうちかゝりて、案じ給ひしなり。かりそめにも、自由に臥したりなど、案じたりし事はなし。われ〳〵も、自然寢覺めなどに詠みたるを、起きて見れば、必ずよくもなかりしなり。

○

○いつも煤けたる―「亡父卿は、寒夜の冴え果てたるに燈火幽かにそむけて、白の淨衣のすゝけたりしを上ばかり打かけて紐結びて、その上にふすまをひき張りつゝ、そのふすまの下に桐火桶を抱きて肱をかの桶にかけて唯獨り閑疎として、床の上にうそぶきて詠み給ひける也。」（桐火桶）

一、先達も後生も、古今をば、片手に放たず持つべきなり。歌をもそらに覺ゆべき事也。（以上卷一）

○

○卷一―群書類從和歌部に徹書記物語として收めたり

家隆は四十以後始めて作者の名を得たり。それより前も、いかほどか歌を詠みしかども、名譽せらるゝ事は四十以後なりしなり。頓阿は六十以後此の道に名を得たるなり。かやうに昔の先達も、初心から名譽なかりしなり。稽古數寄功積りて名譽有りけるなり。今の時分の人、いまだ歌ならば一二首よみて、やがて定家家隆の歌を似せんと思ひ侍る事をかしきことなり。定家も、行かずして長途に到る事なしと書きたり。坂東鎭西の方へは、日を經てこそ到るべきに、只出立一足に到らんとするが如し。たゞ數寄の心深くして、晝夜の修行怠らず、まづ〳〵なひ〳〵と口かろに詠みつけなば、自然求めざるに興有る所へ行著くなり。但後京極攝政殿は三十七にて薨じ給

ひしが、生得の上手にておはしまして、殊勝のものども遊ばしき。若し八十九十の老年までおはしましたらば、いかに猶重寶ども遊ばされんずらんと申し侍りし。宮内卿は二十より内に亡くなりしかば、いつの程に稽古も修行もあるべきぞなれども、名譽ありしは、生得の上手にて有る故なり。生得の堪能に至りては、初發心時便成正覺なれば、修行を待つ所にはあらず。然らざらん輩は、唯不斷の修行を勵まして、年月を送りなば終に自得發明の期あるべきなり。たゞ數寄に超えたる重寶も肝要もなきなり。上代にも、數寄の人々は、古今の大事をも許し、勅撰にも入れられ侍り。まことに數寄だにあらば、などか發明の期なからむ。（卷二）

○卷二―正徹物語の卷二は清巖茶話と題して續群書類從和歌部に收めたり。

室町時代　文學類選　終

室町時代（自建武元年至慶長七年）文學年表

天皇	年號	著作	年號	作家	種類
一九九四 後醍醐			建武 三	僧向阿死す。	短歌
			延元 元	僧絶海生る。	連歌
			同 三	二條爲世死す。	歌論
一九九九 後村上（光明）（崇光）（後光嚴）	延元 四	神皇正統紀（北畠親房）	正平 元	僧師錬死す。	史論
	興國 四	風雅和歌集（花園上皇）	同	僧慶運生る。	隨筆
	正平 元	徒然草（卜部兼好）	同 五	卜部兼好死す	短歌
	同 五？	菟玖波集（二條良基）	同	僧玄惠死す。	連歌
	同 十一	新千載和歌集（藤原爲定）	同 六	僧夢窓死す。	物語
	同 十四	新拾遺和歌集（藤原爲明）（僧頓阿）	同 九	北畠親房死す。	
	同 十九	筑波問答（二條良基）	同 十三	足利尊氏死す。	
	正平 中	增鏡	同 十八	結崎元清生る。	
	未 詳				
二〇二 長慶（後圓融）					
二〇三 後龜山（後小松）	未 詳	井蛙抄（頓阿）	文中 元	僧頓阿死す。	短歌
	同	草庵和歌集（同）	元中 二	宗良親王薨ぜらる。	物語
	同	太平記	同 五	僧義堂死す。	連歌
	同	吉野拾遺（隱士松翁）	同	二條良基死す。	
	弘和 元	新葉集（宗良親王）			
	元中 元	新後拾遺和歌集（藤原爲遠）（同 爲重）			
二〇五二 後小松	未 詳	義經記	應永 八	東常緣生る。	短歌
	同	曾我物語	同 九	一條兼良生る。	物語
	應永 七	花傳書（結崎元清）	同 十二	僧絶海死す。	連歌
	同 十五	耕雲口傳（花山院長親）			謠曲
	同 二五	別紙口傳（結崎元清）			猿樂論
	同 二七	至花道書（同）			歌論
	同 三〇	能作書（同）			
二〇七二 稱光			同 二二	僧蓮如生る。	
			同 二七	今川貞世死す。	
			同 二八	僧正徹生る。	
			同	宗祇生る。	
二〇八八 同	永享 二	正徹物語（僧正徹）	永享 元	花山院長親死す。	短歌
後小松	同	申樂談義（結崎元清）	同 四	太田道灌生る。	連歌
	同 十	新續古今和歌集（飛鳥井雅世）	同 九	僧心敬生る。	歌論
	文安 中	文安田樂記	嘉吉 三	牡丹花肖柏生る	謠曲
	寬正 二	さゝめ言（僧心敬）	同	結崎元清死す。	狂言
			長祿 三	僧正徹死す。	伽草子
			寬正 六	山崎宗鑑生る。	
			永享 元	僧蓮如死す。	
			同 四	今川貞世死す。	
			同 二八	僧正徹生る。	
			同	宗祇生る。	
二一六〇 後柏原	永正十一	犬筑波集（山崎宗鑑）	文龜 二	宗祇死す。	
二一八六 後奈良	大永 八	閑吟集	大永 七	牡丹花肖柏死す。	俳諧
	天文 九	獨吟千句（荒木田守武）	享祿 五	柴屋軒宗長死す。	短歌
			天文 三	細川幽齋生る。	歌論
			同 十八	荒木田守武死す。	伽草子
			同 二二	山崎宗鑑死す。	狂言
二二一七 正親町			永祿 二	小野通女生る。	
			同 四	藤原惺窩生る。	
			同 十二	木下長嘯子生る。	
			元龜 二	松永貞德生る。	
			天正十一	林羅山生る。	
二二四六 後陽成			慶長 五	里村紹巴死す。	

著作權所有

昭和六年九月十日印刷
昭和六年九月十五日發行

【定價金壹圓八拾錢】

室町時代
文學類選
奥附

著作者　岩城準太郎

發行者　永田與三郎
東京市神田區錦町三丁目九番地

印刷者　永田與三郎
東京市神田區錦町三丁目九番地

印刷所・桃谷印刷株式會社

製本所・日本印刷製本株式會社

發行所　東京市神田區錦町三丁目九
大阪市南區內安堂寺町一丁目廿八
東洋圖書株式合資會社
振替東京一〇三七番・振替大阪三九五五六番

大賣捌所
（東京）文修堂・東京堂
（大阪）寶文館・
（名古屋）川瀨・星野
（京都）京都書籍
（博省堂）
（久留米）菊竹
（佐賀）大坪
（熊本）長崎

▲江戸時代の代表的名家の文章選集一松尾芭蕉(俳諧文學)二井原西鶴(物語文學)三近松門左衛門(劇文學)四新井白石(儒教文學)五谷口蕪村(俳諧)六上田秋成(物語)七本居宣長(國學者の文學)八曲亭馬琴(物語)

▲藝術的價値・國文學史的價値・讀書資料としての價値の三標準より選擇頭註振假名送假名句讀段落を附す

▲高等學校國文教科書　各種專門學校教科書・一般國文研究家の好參考書。全國各地にて採用校多數。

奈良女高師教授　岩城準太郎先生著

色紙型　定價　一圓九十錢
三五〇頁　送料　十二圓

【五版】

江戸時代八大家文

內容目次

一　松尾芭蕉
奥の細道
幻住庵の記
芭蕉を移す辭
柴門辭
凧（俳諧）
芽獨活（發包）

二　井原西鶴
大晦日は合はぬ算用
毒酒を請太刀の身
約束は雪の朝食
初午は乘つて來る仕合
煎じやう常とは變る問藥
祈るしるしの神の折敷
鼠の文つかひ
奈良の庭竈
才覺の軸すだれ

三　近松門左衛門
國性爺合戰、第三
同　第四—九仙山

四　女殺油地獄　下卷
新井白石
源頼朝
足利義滿
攝家論
折焚柴の記序
板倉勝重
柳生宗矩
淺野長政

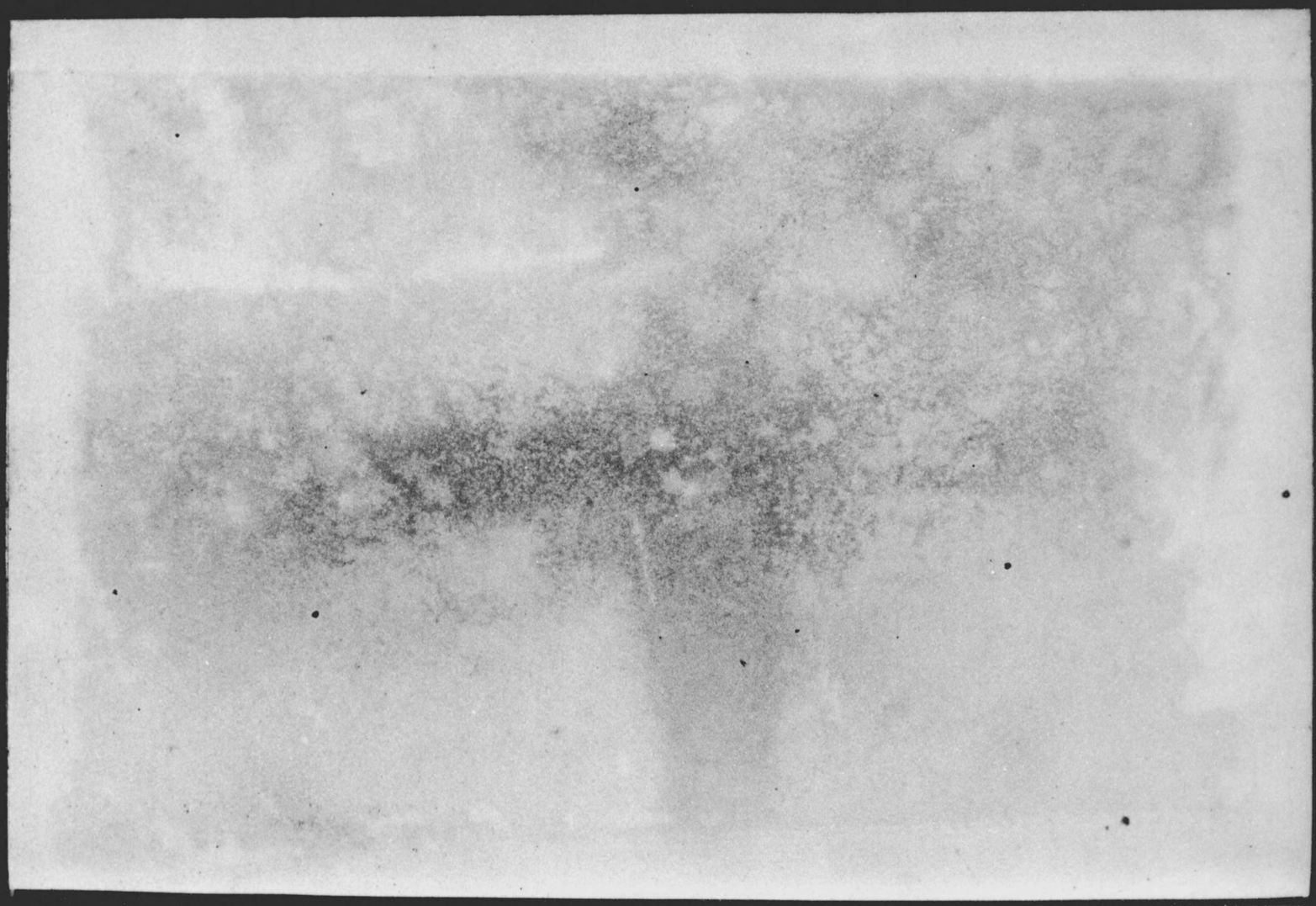
五　谷口蕪村
洛東芭蕉庵再興記
葛翁圖贊
狸
宇治行
白菊（俳諧）
鶯（發句）

六　上田秋成
白峯
夢應の鯉魚
吉備津の釜

七　本居宣長
海賊
古戰場
長町
源氏物語のことども
吉野の瀧
縣居の大人は古學の祖なる事
大神宮の萱葺なる說
己が物學びのありしやう
縣居の大人の御さとし言
業平朝臣のいまはの言葉
花のさだめ
靜かなる山林を住みよしといふ事

八　曲亭馬琴
爲朝
歡樂鄉
芳流閣
山陵志逸事

附錄　江戸時代文學年表

東京大阪　東洋圖書株式合資會社　發兌

東京市神田區錦町三丁目九番地・攝替東京一〇三七番
大阪市南區・內安堂寺町一丁目二八・攝替大阪三九五五六番